

第47回古代史を解明する会

日本人の起源

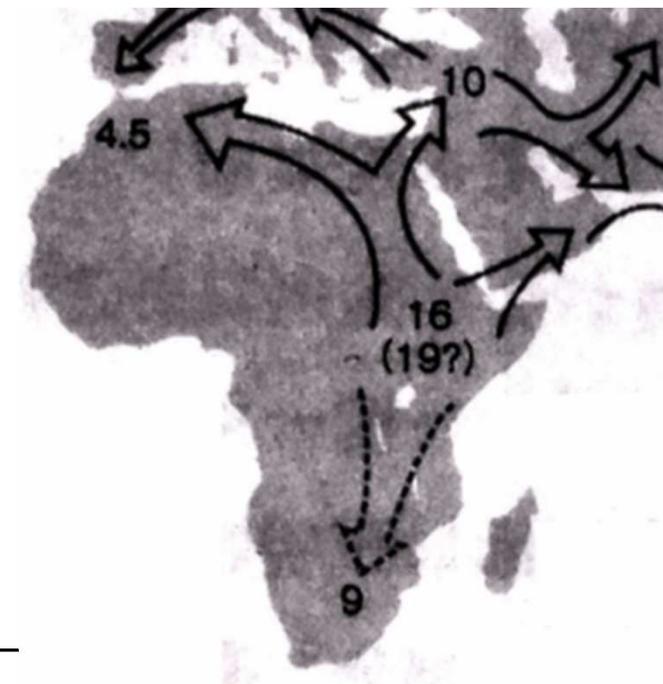
最新のDNA成果を反映する

2025年1月18日

丸地三郎

従来の課題点

- 2021年1月23日に当会で「日本人の起源」基本レポートを実施
 - 現時点で、改めて、この基本レポートの課題点を指摘する。
 - 2025年までの4年間で、判明した事実から、解明された事実が有る。
1. 出アフリカの出発点・2案:
 - ①シナイ半島経由
 - ②アラビア半島の先端を経由
 2. ヒマラヤ南ルート/北ルート
 - ① 南ルート
 - ② 北ルート
 3. 日本への渡来ルート
 - ① シベリヤ・サハリンルート
 - ② 朝鮮半島ルート
 - ③ 台湾ルート
 4. スンダ大陸から日本へのルート
 - スンダ大陸からパプアニューギニア・オーストラリアへのルー
 5. 沖縄出土の古代人 消滅説
 6. 日本人3重構造説
 7. 九州の縄文人に、弥生渡来人のDNAが混在
 8. 沖縄の宝貝産地説



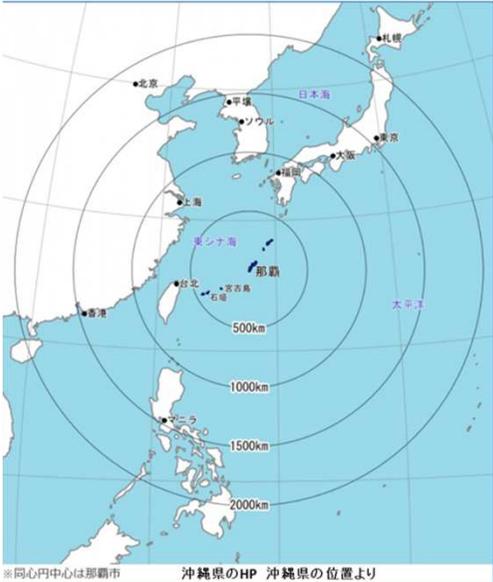
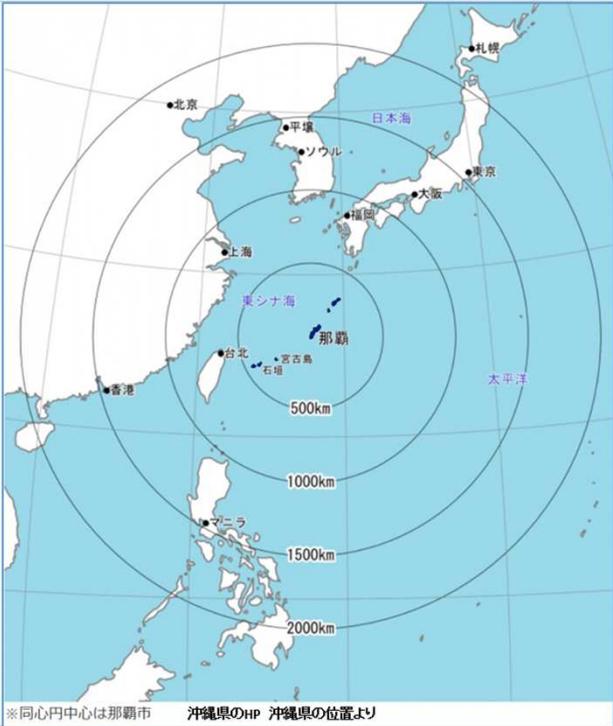
日本古代史ネットワーク
第2回 解明委員会

テーマ: 日本人の起源
基本レポート
問題・課題

2021年1月23日
丸地 三郎

日本人の起源
基本レポート
「沖縄の古代歴史
の真実は？」

2021年7月31日
丸地 三郎



日本古代史ネットワーク
第14回 解明委員会

基本レポート
日本人の起源
「沖縄と宝貝」

2022年2月12日(土)
丸地 三郎

従来の課題点の解答-1

• 課題点

1. 出アフリカの出発点・2案:

①シナイ半島経由 ----- ○

②アラビア半島の先端を經由 ---- ✕

- ✓ 出アフリカをした新人(ホモサピエンス)の多くに、旧人(ネアンデルタール人・デニソワ人)の混血が認められたことから、シナイ半島付近に居た旧人と混血したと判断され、シナイ半島経由が有力となった。

2. ヒマラヤ南ルート/北ルート

① 南ルート-----○

② 北ルート-----✕

- ✓ 石器の分布から来たルートは、考古学者が北ルートを有力としてきたが、東アジアの民族群のDNA解析及び、北ルート上のマルタ遺跡人の影響が無いことから、北ルートは無かったと判明。

3. 日本への渡来ルート

① シベリヤ・サハリンルート-----✕

② 朝鮮半島ルート-----✕

③ 台湾ルート-----✕

- ✓ シベリヤ・サハリンルートは、日本の旧石器時代(3万年前以降)に北海道の黒曜石を持った日本先住民が進出し、サハリンへの元寇(13-14世紀)まで継続し、現在の住民にも日本先住民のD2のY-DNAが存在。細石刃石器の技術と人の移動は、連動する根拠が無い。
- ✓ 朝鮮ルートは、朝鮮側の考古学の成果では、旧人が存在した痕跡は有るが、それ以降、1万年前まで新人の存在した痕跡は無い。1万年前以降は、日本の先住民が朝鮮半島の奥まで移住し、縄文遺跡を残す。従って、朝鮮半島からの移住は無い。
- ✓ 台湾ルートは、科学博物館の海部氏が丸木舟を作り実験し、成功したが、3万年前に台湾から渡来したとの前提自体に疑問符が付き、3万8千年前に日本に到達していた先住民の祖先にはなり得ないと、否定的見解が大多数になった。

従来の課題点の解答-2

4. スンダ大陸から日本へのルート

- スンダ大陸からパプアニューギニア・オーストラリアへのルート
- ✓ シベリヤ・サハリン/朝鮮/台湾ルートの可能性が否定されると、残るルートは、スンダ大陸からのルート。5-6万年前にスンダ大陸から80kmの海を越えてオーストラリア大陸への移動が確認されており、技術的には、帆付の舟が有力視されている。
- この件は、別頁で記述する。

5. 沖縄出土の古代人 消滅説

- ✓ 沖縄国際大学と沖縄大学の学長を歴任した高宮廣衛とその子の鹿児島大学教授高宮広土が積極的に唱えてきた説で、「旧石器文化人が島嶼環境に適応できずに島を去るか絶滅した」との説が、沖縄の歴史では常識であった。
- ✓ 2007年人骨の発見された石垣島の白保竿根田原洞穴遺跡などの研究成果などから人骨発見の時代から連続性が認められ、「旧石器人の消滅説」は否定された模様。
- ✓ 「旧石器人の消滅説」は2025年には、ネット上では、殆ど見つからない状況に至った。
- この件は、別頁で記述する。

6. 日本人3重構造説

- ✓ 2024年10月に発表された「土井ヶ浜遺跡の人骨DNA解析結果」の中で、弥生人のDNAの代表モデルの取り扱いの変更が行われ、(取り扱い間違いがあった)三重構造説は否定された。
- この件は、第45回 11/9日の資料を参照下さい。

7. 九州の縄文人に、弥生渡来人のDNAが混在

- ✓ 弥生時代まで生きた縄文人のDNA解析を行った結果、縄文人と弥生人の混血であったことが判明。
- ✓ 韓国南岸部の6400年前の古代人のDNA解析の結果、縄文人と弥生人の混血と判明。
- この件は、別頁で取り上げ、記述する。

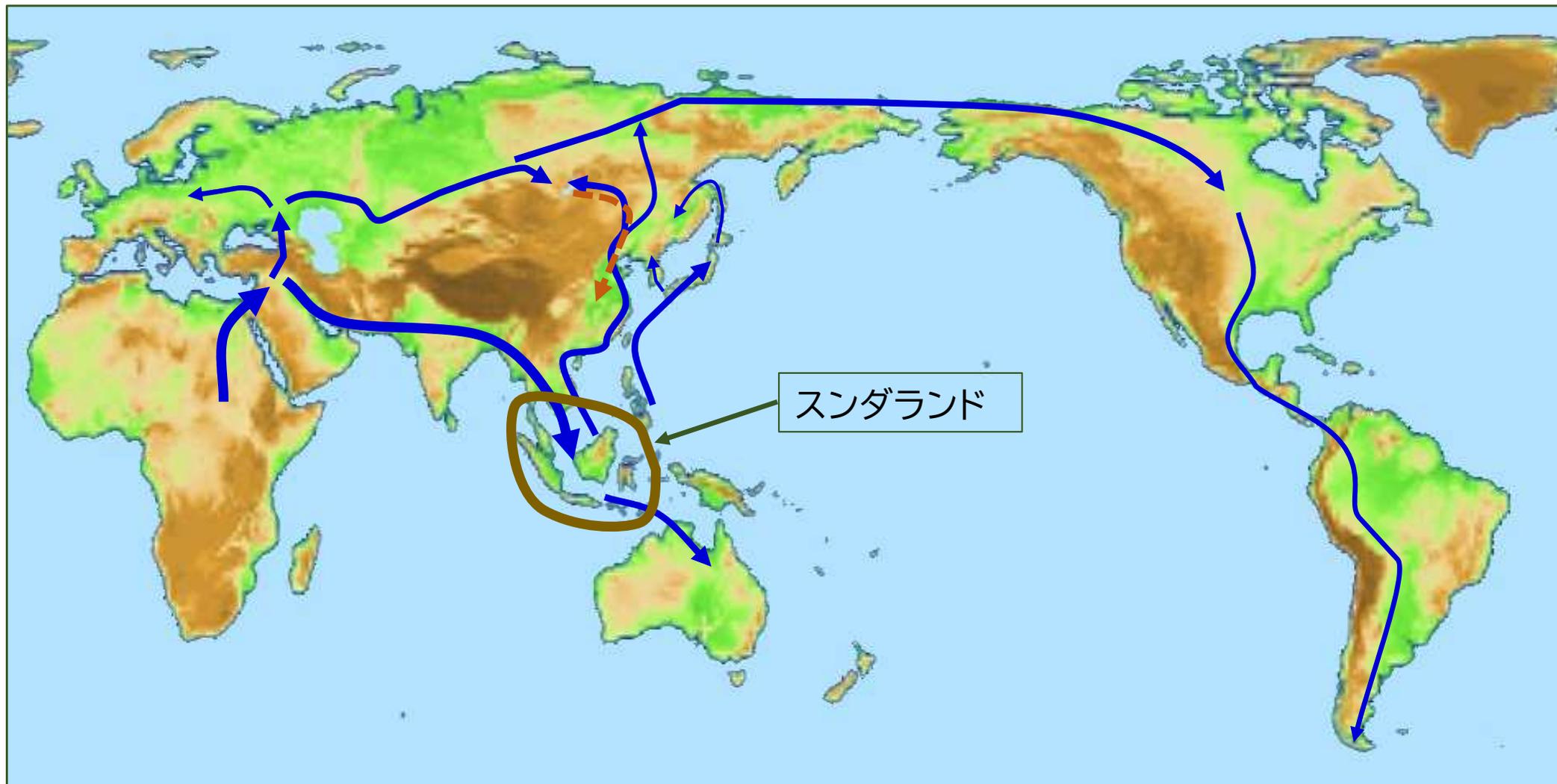
8. 沖縄の宝貝産地説

- 新しい資料と材料が見つかり、別途説明、紹介を行う。

2021年1月の「日本人の起源」基本レポート

- 基本レポートについて、今回見直して、修正・訂正すべき個所は少なく、下記の通り。
 - 出アフリカから東アジアまでの渡来ルート(8～11頁)
 - アラビア半島の先端を經由の出アフリカ・ルートは無い。
 - ヒマラヤ北ルートは無くなる。
 - DNA関係でミトコンドリアDNAに、(34－35頁)関しては、削除。
 - 篠田謙一氏の縄文人のミトコンドリアDNAに関する調査結果は、本人からの訂正は無いが、誤りの可能性が高く、削除します。
 - 34頁には、ヒマラヤ北ルートへの疑問を提示していました。
 - 沖縄の特異性(39～42頁)
 - 「旧石器人の消滅説」に対する反論を記載していたが、今更、強調することは無くなったのは幸い。

日本人を主にした出アフリカ拡散ルート案



- 出アフリカ→スンダランド : 7万~6万年前
- スンダランド→オーストラリア : 5万年前
- スンダランド→フィリピン→沖縄・日本列島 : 4万年前
- スンダランド→中国大陸→バイカル湖周辺 : 4万年前
- バイカル湖周辺→中国大陸 : 2万年前以降
- 日本→北海道→シベリヤ : 3万5千年前

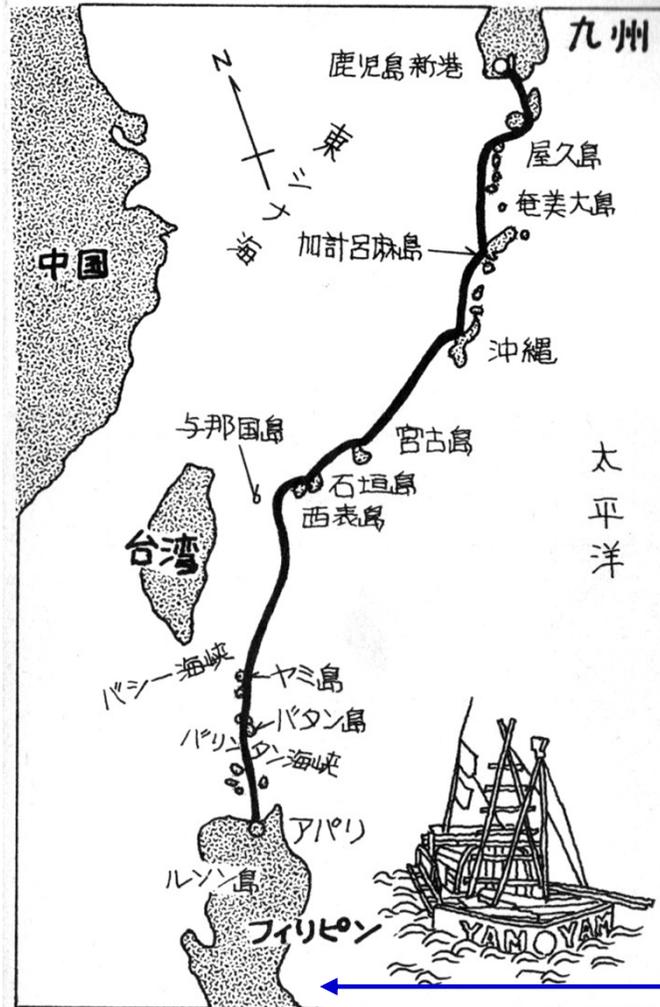
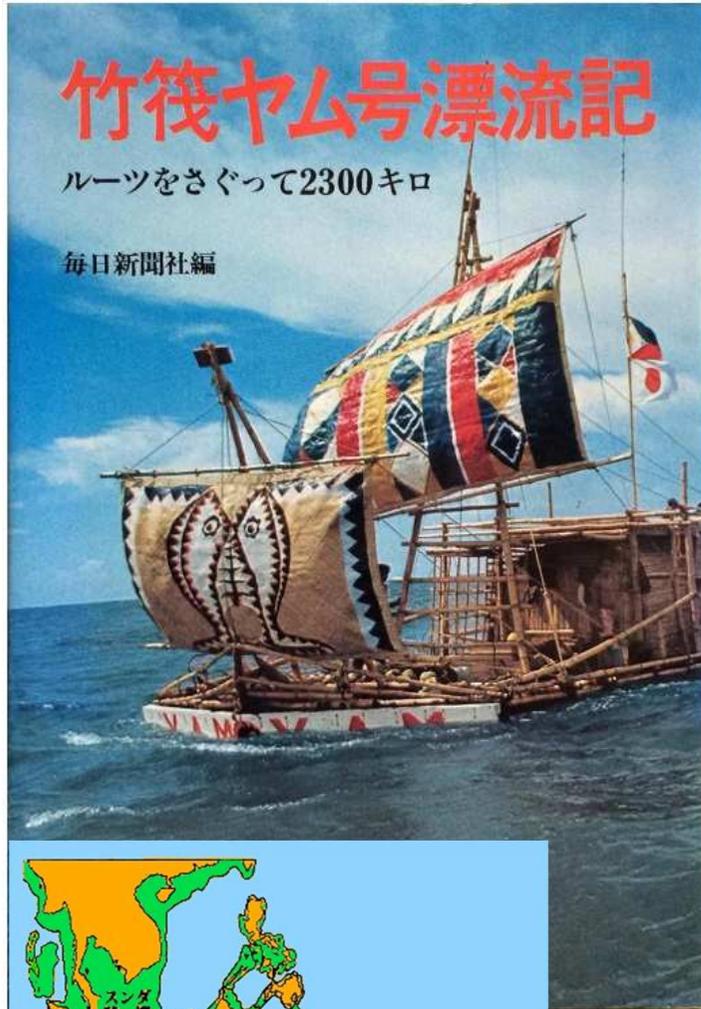
- 出アフリカ→コーカサス山脈越え : 5~4万年前
- コーカサス→ステップ地帯・バイカル湖:4.5万年前
- コーカサス山脈→ヨーロッパ : 3万年前
- シベリヤ→アラスカ→アメリカ大陸 : 1.4万年前

2025/01/10 丸地案

スンダランドから日本へのルート

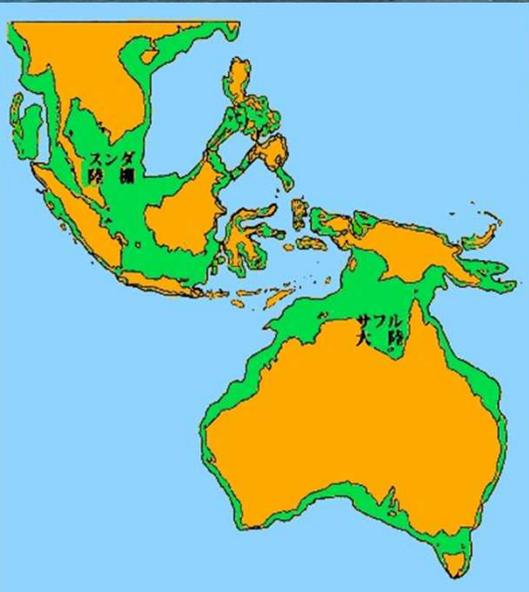
- 旧石器人(D2/D1b/D1a2a-M55)及び(C1/C1a1/C-M8)の渡来ルートはスンダランドからの到来と推定される。
 - その渡来ルートは、従来、北ルート/朝鮮半島ルート/台湾ルートなどが論じられたが、現実的な根拠が無い。
 - 一番可能性が高いのは、スンダランドに隣接したフィリピンに居住し、4万年前に、帆付の丸木舟で、黒潮に乗り、直接沖縄・日本本土へ到着したルートと考える。根拠は以下に示す。
- 1. スンダランドから5万年前にオーストラリアとパプアニューギニアへ移住した人々は、海面低下を考慮しても、80 km以上の海を渡り、移住している。文化人類学者/考古学者から、この移住の方法の最も有力な方法は、帆の付いた筏又は小舟と推定されている。
- 2. 台湾からの移住は、海部氏の実験では、2回の失敗があり、最終的に丸木舟を手漕ぎで渡来に成功したが、現実的な民族移動の方法としては、不適切なものと見られる。
- 3. フィリピンから沖縄・日本本土への実験航海や戦時中・直後の避難航海の成功例があり、現実的な民族移動の方法と推定できる。
 1. 1977年 竹筏ヤム号にてフィリピン・ルソン島出発→鹿児島港 2300km
(双葉文庫 ヤム号漂流記 倉島 康著 / 毎日新聞社 竹筏ヤム号漂流記-ルーツをさぐって2300キロ)
 2. 1977年 木造双胴帆船でフィリピン・ルソン島出発→鹿児島港 2500km
(角川文庫 翔べ怪鳥モア—野性号IIの冒険・)
 3. 1946年6月 9名の日本兵 1隻のカヌー(アウトリガー付き)に乗りフィリピン・ポリリオ島(ポリリヨ島)→屋久島 2600km 30日間
(波頭二千六百キロ 日本兵の漂流--ポリリオ島 「アジア海道紀行」の一部 足立倫行著)
- 黒潮に乗り、30日~44日で日本本土へ到着しており、フィリピン付近で、海洋航海に経験を積んだ人々ならば、沖縄・日本本土への航海は可能であったと推定する。
- 日本の先住民の遺跡からは、磨製石斧が出土し、丸木舟用に木材を伐採し、加工が可能であったと推測される。沖縄の在来の丸木舟のサバニは、単純で、使いやすい帆が付く。

竹筏ヤム号・9名の日本兵の舟 及び 航路



日本兵の乗った船は上記より大型で帆付
<http://cb1100f.b10.coreserver.jp/omake4.html> より借用

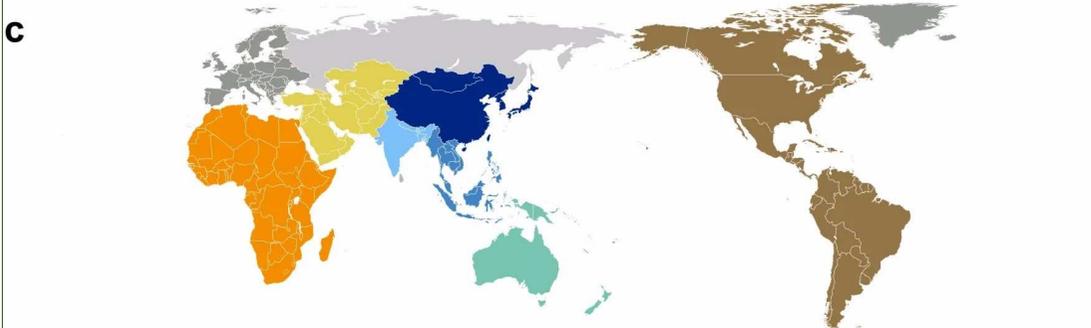
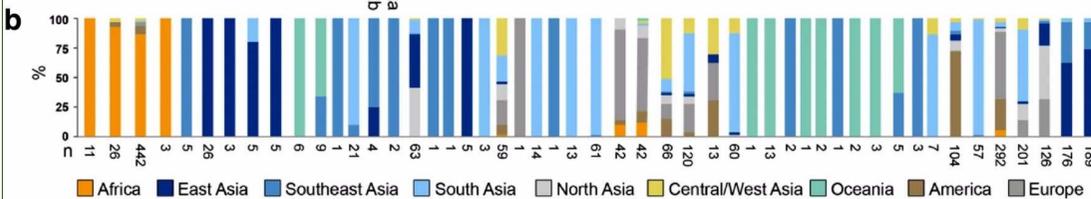
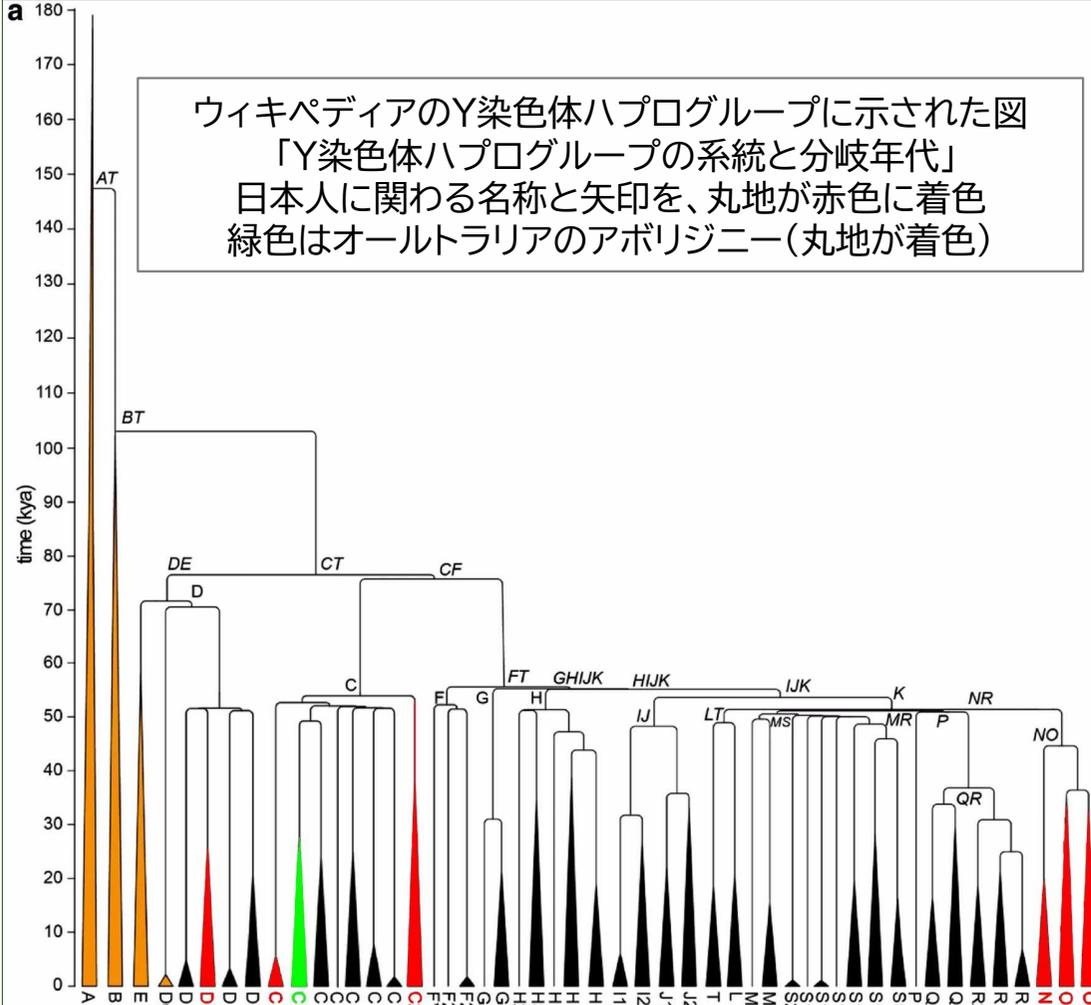
9名の日本兵が出発したポリリオ島は、この付近の島



ヤム号航路略図

スンダランドから日本へのルート

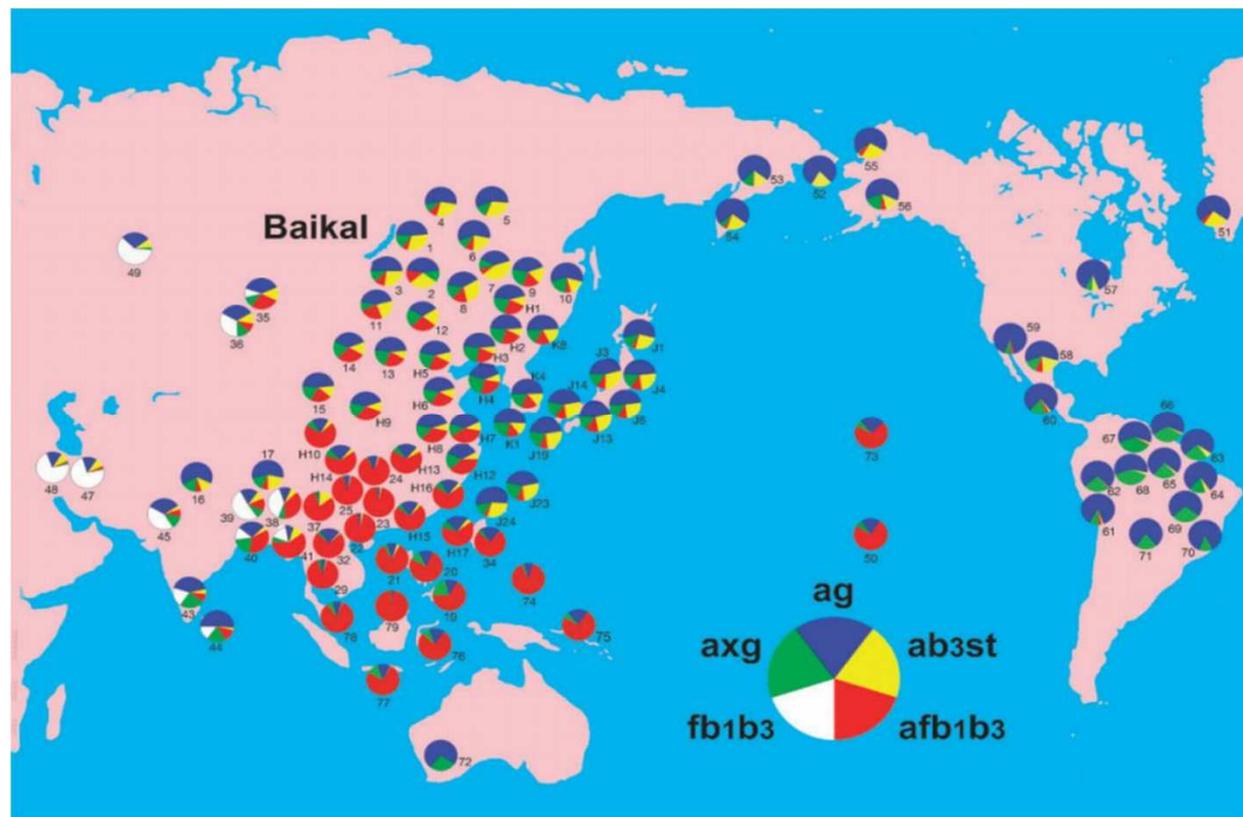
ウィキペディアのY染色体ハプログループに示された図「Y染色体ハプログループの系統と分岐年代」
日本人に関わる名称と矢印を、丸地が赤色に着色
緑色はオーストラリアのアボリジニー(丸地が着色)



- ウィキペディアのY染色体ハプログループに示された図「Y染色体ハプログループの系統と分岐年代」
- 日本の縄文人のY-DNAは、この図上では、**D1a2**と**C1a**。オーストラリアのアボリジニーは、**C1b3**。
 - **D1a2**は、旧**D2**で、**D-M55**とも表記される
 - **C1a**は、旧**C1**で**C1a1**とも表記される)
- DグループとCグループは、この図から、最初に分岐したのと言え、スンダランドに最初に到着したグループと考えられる。
- **C1b3**は、舟と帆を使いオーストラリアに5万年前頃に移住したと、文化人類学者などは推定。
- 縄文人の**D1a2**と**C1a**も、4万年前に舟と帆を使い、スンダランドから移動したとしても、おかしくない。
- **C2(C-M8)**は、シベリヤの東北部に居住したオロチョン族・エベンキ族などで、旧石器時代にシベリヤで縄文人と混血した可能性があり、その後、5～6世紀にオホーツク人が北海道へ到来し、アイヌ人と混血した。この歴史年代の混血の結果が、現代人のDNAに影響していると見られる。
- 弥生渡来人のY-DNAである**O系統**は、分岐された時期は比較的新しく、スンダランドへ到来した人種としては、最後のグループと推定される。
 - 4万年前に、陸上を徒歩で北上した民族に含まれた。
 - 北上せず、残存しスンダランドの新しい主役となった。
 - 北上の原因をもたらしたと推定する。
 - 原因は熱帯マラリアと推定。

免疫グロブリンG(Gm)の標識遺伝子の分布 の解釈

- 東アジアの民族は、ヒマラヤ北ルートを通らなかったことから、Gm遺伝子の分布を改めて解釈する。
- スンダ大陸に居た多くの民族が陸上ルートで、バイカル湖付近に行き、極寒期の2万年前を経過し、体形を大型化し、変形させ北方体系の民族と変化した。後に、再び、南方へ移動したと推測される。
- 極寒期2万年前以降、スンダ大陸は海面上昇で面積が減少し、北方への移住が始まった。
- 中国大陸では、北方・南方の両グループが集まり、混血が発生したと推定。
- その結果が、赤色と青/緑/黄の割合が表の図のように分解されたものと推定。
- 日本は、海で隔離されたため、スンダ大陸の状態が保たれたと推定。弥生渡来人も比較的混血が少なく、バイカル湖周辺に近い状態が保たれたもの。



免疫グロブリンG(Gm)の標識遺伝子の分布
世界のモンゴロイド、130集団についての調査結果
大阪医科大学名誉教授の松本秀雄博士の書物
「日本人は何処から来たか」

- ✓ 日本人を主にした出アフリカ拡散ルート案に記した茶色のバイカル湖から中国大陸へ移動ルートは上記の移動を反映したもの。

沖縄出土の「古代人絶滅説→ 消滅」 *New!*

- 沖縄国際大学と沖縄大学の学長を歴任した高宮廣衛氏とその子の鹿児島大学教授高宮広土氏が積極的に唱えてきた説で、「旧石器文化人が島嶼環境に適応できずに島を去るか絶滅した」との説が、沖縄の歴史では常識であった。
- 沖縄の古代人骨に残る旧石器人は滅亡したとの説は、現在のインターネット上では、殆どが消滅している。手元などに残る書籍等から下記の2件を示し、いかに圧倒的な説で、反論が認められなかったことが判る。
 - 2010年発行の月刊考古学ジャーナルは、特集「南西諸島の考古学」で、高宮広土氏が総論：南西諸島の先史学を記す。7件の論文が記載されたが、その全ては高宮氏が論者・テーマを選定したもの。
 - その内の1論文は伊藤慎一氏の「ヒトはいつどのように琉球列島に定着したのか？」で「滅亡論」を否定する論文。この論文に対して、高宮氏は総論で、「旧石器時代の人々が現代の琉球列島の人々の直接の祖先であったとすれば、世界的に大変珍しい情報を提供するものと思われる。」とあざ笑うかのコメントを記した。
 - 2011年発行民博通信 NO133 『日本列島への先史人類の移動と拡散共同研究文』 印東道子著が有る。
 - 「琉球諸島内で、在来の旧石器文化人とあとからやってきた新石器文化人とが出会った可能性については、研究者の意見は一致していない。高宮は、旧石器文化人が島嶼環境に適応できずに島を去るか絶滅したため、このような出会いはなかったと考える。」 ---- 旧石器人絶滅が前提となっている。
 - 海部陽介(国立科学博物館)は、コンピュータを使って(港川人骨の)仮想復元を行った結果を紹介した。
 - 1)港川人と本土の縄文人はあまり似ていない。旧石器文化人と縄文人との連続性は、少なくとも沖縄では認められない。
 - 2)港川人と形態特徴がもっとも近い現代人集団は、アジア人ではなくオーストラリア・ニューギニアの人である。
 - 「共同研究文」で旧石器人、絶滅のシナリオを示したのは、下記
 - 海部陽介「後期更新世のアジアにおける人の移動誌：港川人の再検討を中心に」
 - 高宮広土「南島中部圏へのヒトの拡散と適応過程」
 - 米田穰・中川良平「琉球諸島へのヒトの拡散：『最後の陸橋』はあったのか？」
 - 石田肇「琉球諸島のヒト——過去から現代まで」
- 絶滅の時期は、1万4千年前～7千年前。この時期を空白の期間と呼んで問題視していた。

沖縄出土の古代人 消滅説を覆した事実-1

- 2002年 九州大学医学部 古賀英也氏が『西南日本人のストレスマーカー』/論文発表
 - 沖縄の旧石器人の絶滅説の唯一の根拠である骨に残るハリス線(飢餓の痕跡)を統計的に解析
 - 縄文・弥生・古墳・中世・近世・現代の男女649名の人骨を解析。ハリス線の出現率を算出。
 - 現代人でも50%にハリス線が存在し、ハリス線が絶滅を示すものでは無いことを証明。

表7 男女別ハリス線出現頻度

時代	男性		女性		
	観察数	出現数 (%)	観察数	出現数 (%)	
縄文	9	3 (33.3)	4	1 (25.0)	
弥生	古浦	10	7 (70.0)	9	4 (47.2)
	土井ヶ浜	37	8 (23.5)	33	6 (18.2)
	福岡・佐賀	96	47 (49.2)	51	22 (43.1)
古墳	広田	16	1 (6.2)	11	1 (9.0)
	墳丘墓	26	13 (50.0)	4	2 (50.0)
中世	横穴墓	25	16 (64.0)	5	2 (40.0)
	吉母浜	19	9 (47.4)	19	9 (47.4)
近世	天福寺	30	17 (56.7)	27	11 (40.7)
	原田	33	19 (57.6)	24	13 (54.2)
現代	143	68 (47.5)	18	11 (61.1)	

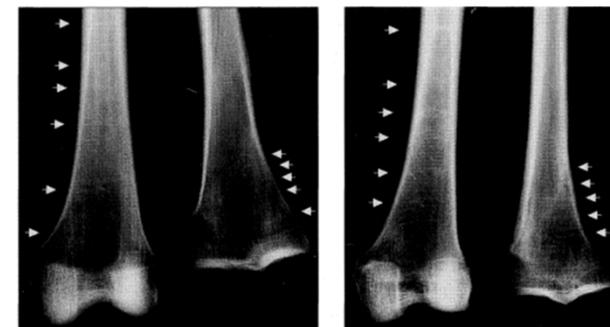
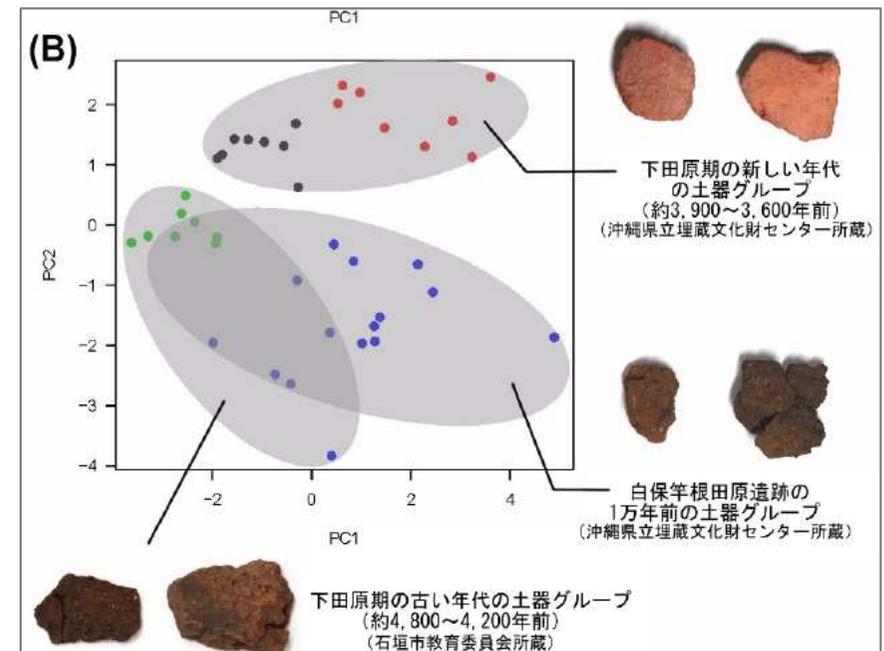
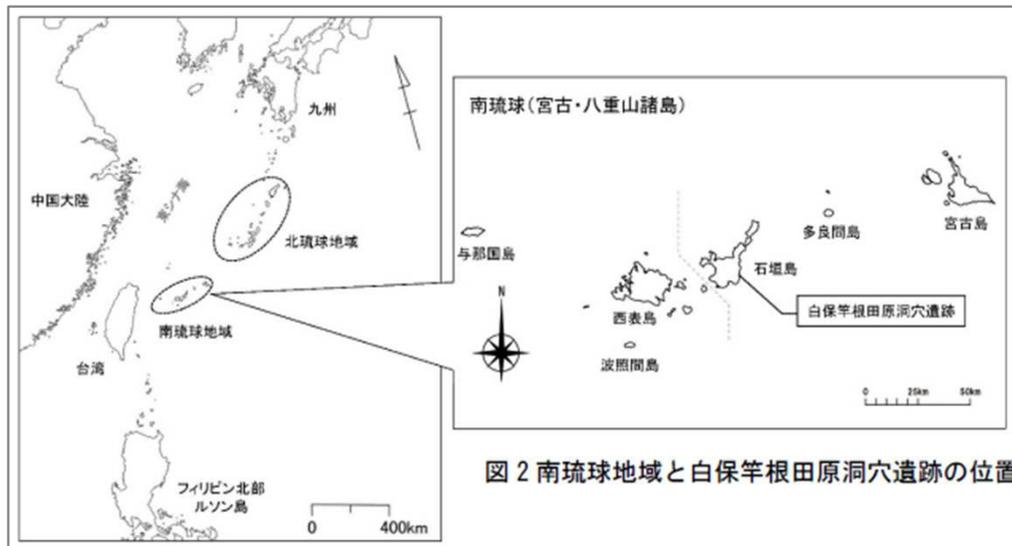


図1 ハリス線のレントゲン写真像(現代人)

- 2021年11月「沖縄で1万～9千年前の人骨発見 貝塚時代で最古、「空白期」埋める藪地洞穴遺跡」
新着ニュース バックナンバー2で取り上げました。
 - 沖縄県うるま市の藪地洞穴遺跡で、約1万～9千年前の貝塚時代の人骨が発見されたことを8日、うるま市教育委員会が発表した。
 - 次頁の絶滅を否定する研究発表を、支える発掘やその成果発表が、複数行われた。

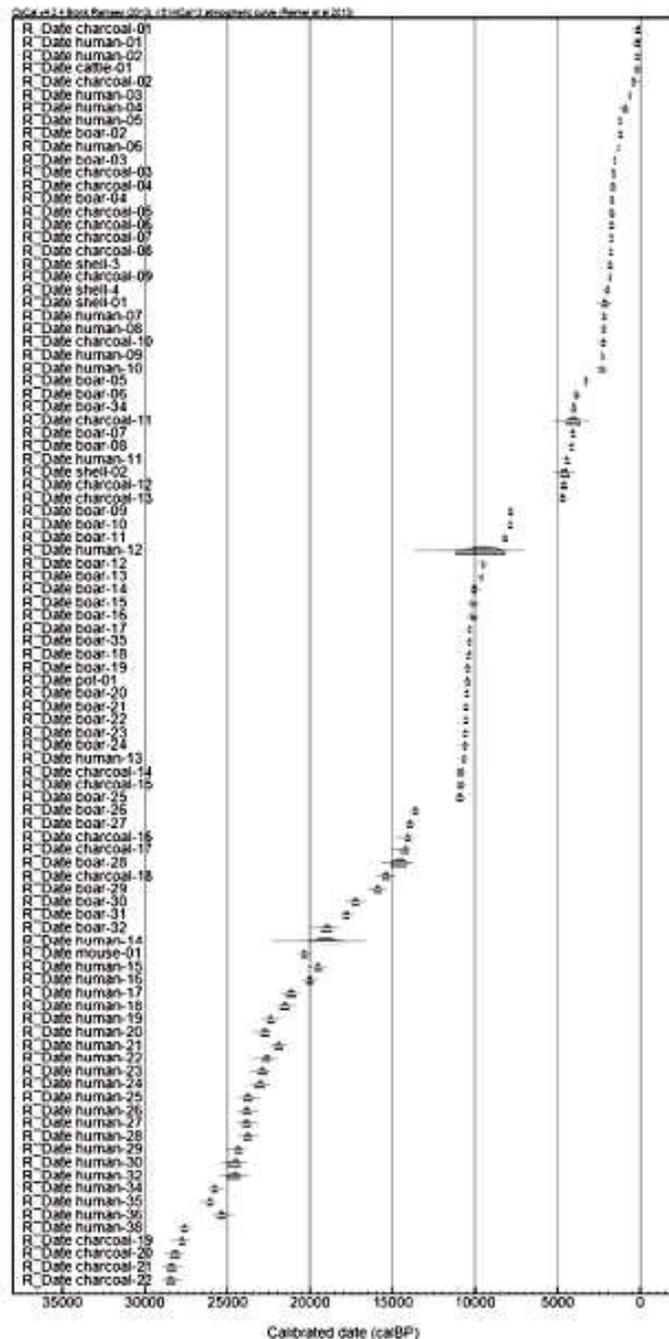
沖縄出土の古代人 消滅説を覆した事実-2

- 2019年 琉球大学発表 <https://www.u-ryukyu.ac.jp/wp-content/uploads/2019/07/HP0701.pdf>
 - 2007年 沖縄県石垣市 白保竿根田原洞穴遺跡で
 - 人骨発見。2万8千年前の人骨。
 - 1.8万年前/1.5万年前の人骨など19体分
 - 2万3千年前から1万4千年前の時期の貝具・装飾品など多数発見
 - 1万年前の土器、出土。下田原期(4800~3600年前)の土器出土。
 - 土器の胎土を解析。1万年前の土器と、4800~4200年前の下田原式土器の胎土が共通し、3900~3600年前の土器の胎土が異なることが判明。
 - 1万年前から4200年前までの土器は共通技術で作成されたことが判明。
 - 1万年前から4200年前までは、同じ文化を持つ民族が継続していたことが判明。
 - 人骨・貝具等と土器の分析により、凡3万年前から旧石器人が継続して沖縄石垣島で生息したことが証明された。



沖縄列島の人類遺跡の連続と断絶の時期

第3章 調査の方法と成果



第50図 白保竿根田原洞穴遺跡において測定された較正放射線炭素年代の分布

- 白保竿根田原洞穴遺跡(石垣島:先島諸島)に関して、断絶した時代が報告されている。
 - 佐藤宏之(東大)の記事「白保竿根田原洞穴遺跡の考古学的成果」では、1.3~1.1万年前と8~5千年前の2つの期間で遺跡資料に断絶があるとしている。(較正年代)
 - 沖縄県立埋蔵文化センター調査報告書 第85集では、
 - 左記の表を示し、7,000~8,000年前にデータの欠損が見られるとしている。
 - 28,000年前から13,000年前までの15,000年間については43点の確率分布が連続して存在しているように見えるので、島嶼環境で連続的に(安定的に)ヒトが生存できたと想像したくなるが、年代データは平均350年に1つしか存在せず、遺跡利用の連続・断続については容易に結論を出せない
- 石垣島のある先島諸島の津波
 - 宮古島の津波石が先島諸島の津波被害の大きさを象徴している。
 - 津波被害は先島諸島に集中し、沖縄本島では少ないことが判明した。
 - 現在、解明されている被害は、2千年前、など数千年レベル。
 - この断絶の時期は、津波被害を示したものか？
- 沖縄本島・奄美大島
 - サキタリ洞穴の調査では、11,200~2800年前のFS層は重機で剥ぎ取られ、調査対象から除外され、残念。綿密な解析を行えば、問題解消するのに。
- イノシシの遺跡
 - 野国貝塚(約7200-4400年前)では、多数のイノシシの骨を出土。
 - 新城下原第二遺跡でも、6413~6,022年前のイノシシの骨を出土
 - 古我地原貝塚/前原遺跡など沖縄本島とその付近でも、それ以降のイノシシの骨を多数出土
- 1.3~1.1万年前と8~5千年前の2つ断絶期間につき、上記以外の反証を捜すこととする。

沖縄出土の古代人 消滅説の痕跡

- 「旧石器人絶滅説」の悪影響が、沖縄・琉球に関する各種の論文発表に、**今も、悪影響が残存する。**
- 琉球祖語と日本語との関係：
2024年9月に行った44.「日本語・琉球祖語から見た日本人の起源」にあったように、**沖縄の琉球語は、人が絶滅した沖縄へ九州から人が移動したとの誤った学説をベースに言語学も振り回されていた。**
- DNA解析の解釈：
新着ニュースバンクナンバー01で取り上げた「2万年前の沖縄・港川人 DNA 解析～新聞社間で解釈が正反対」と、有るように、学者の一人は、「**旧石器人絶滅説**」に合致する解釈を取り、他方はそれを無視し、DNAの解釈だけで正しい解釈を行ったために、論文の中の解釈が割れていた。その結果、新聞社の記事内容も割れる不可思議なことが起きた。
- その外にも、沖縄の古代史に関して、悪影響があり、今後、見直されることが多出事ことになる。

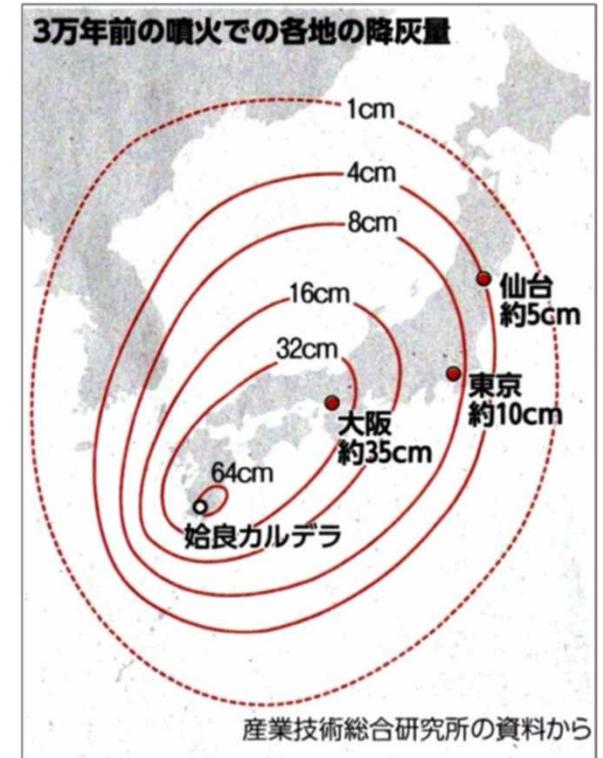
暦年較正年代 Date	¹⁴ C年代 BP	沖縄の人骨化石と土器文化 Human bone and pottery culture in Okinawa	サキタリ洞遺跡 Sakitari-do cave site	日本 Japan	地質年代	
36000年前	32000BP	山下町第一洞穴人 Yamashita-cho		旧石器	更新世 Pleistocene	
30000年前	26000BP		人骨 human bone			器
23000年前	19000BP		貝器と人骨 Shell tools and human bones			
22000年前	18000BP	港川人 Minatogawa		時代	世	
20000年前	16000BP					
15000年前	13000BP	空白の時代 Blank period of human history		縄	完	
14000年前	12000BP					石英製石器と人骨 Stone artifacts and human bones
11000年前	10000BP			時代	新	
10000年前	9000BP					
9000年前	8000BP		押引文土器 Oshibiki-mon pottery	代	世	
8000年前	7000BP	無文土器？ Plain pottery?				
7000年前	6000BP	南島爪形文土器 Tsumegata-mon pottery				

沖縄県南城市「サキタリ洞遺跡の発掘」パンフレットの最終16頁より
2010年から調査し、2018年にパンフレットなど奈文研が作成

日本先住民到来以降の日本・九州の主な出来事

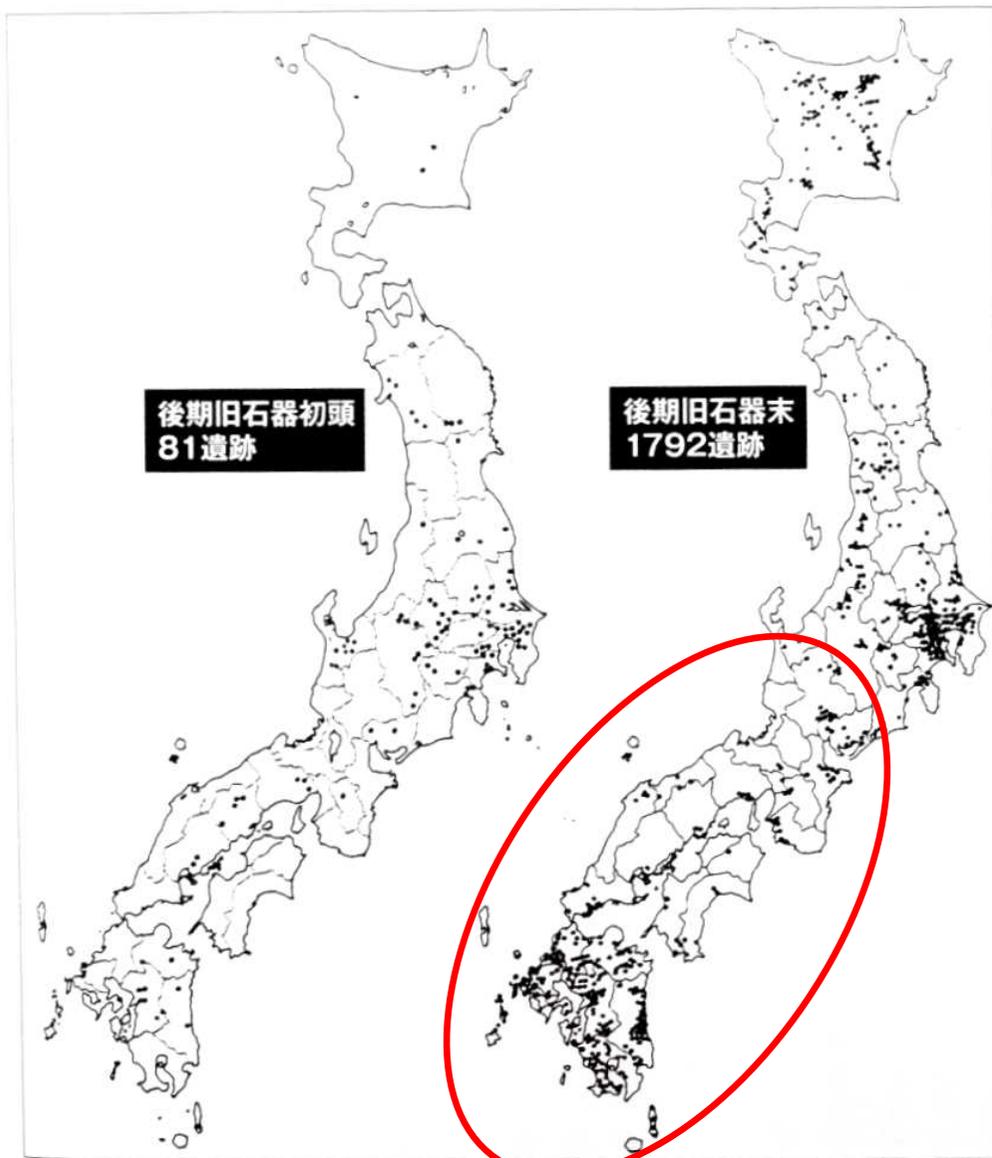
- 遺跡などの発見によって、日本先住民の活動が、全てではないが判明している。
- 海洋民族であった旧石器人(後の縄文人)は4万年前に日本に到来。
 - 3万5千年前、北海道へ渡り、サハリン・シベリアまで拡散。
 - 磨製石斧を使用。黒曜石を活用。世界的に稀に見る早い時期に石器を開発し、道具として活用
 - (3万8千年前/黒曜石獲得のため、伊豆の神津島まで往復航海)
- 3万年前：鹿児島湾の始良カルデラ大爆発発生。火砕流・火山灰被害甚大
 - 九州から四国・中国まで、壊滅的被害(先住民滅亡)。・・中部地方まで被害を甚大。
 - 6千年後の2万4千年前、鹿児島湾の北側に旧石器人の遺跡(耳取遺跡)誕生。
 - 到来した先住民は、始良カルデラ被害の少なかった東北・関東から来たとは考えられない。被害の無かった沖縄諸島から、舟で到来したものと推定される。
 - 鹿児島半島に梶ノ原遺跡誕生。定住集落を形成、煙道付炉穴を有し、南方文化を有する。隆帯文土器を残す。
 - 梶ノ原石斧(丸のみ型石斧)は1万4千年前に沖縄本島で開発、奄美大島に生産基地あり。
 - 梶ノ原へ来た先住民は、沖縄列島から来た旧石器人と考えるのが妥当。(沖縄で旧石器人消滅せず)
 - 桜島の爆発でサツマ火山灰で消滅

始良カルデラ爆発の火山灰被害の範囲



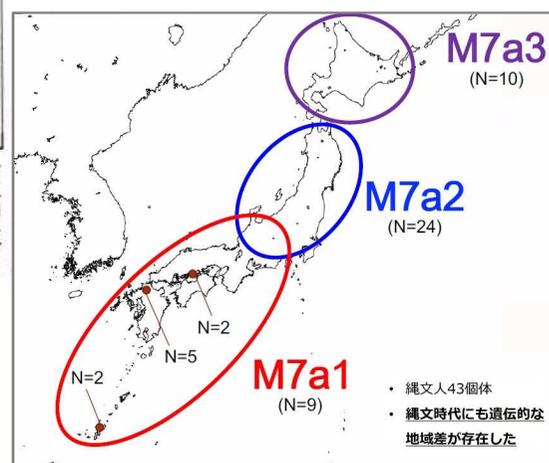
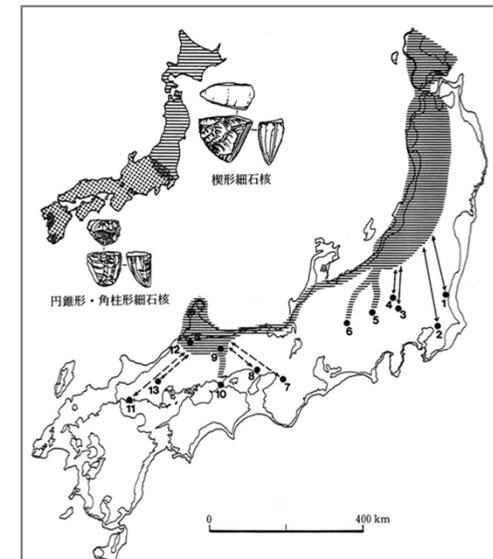
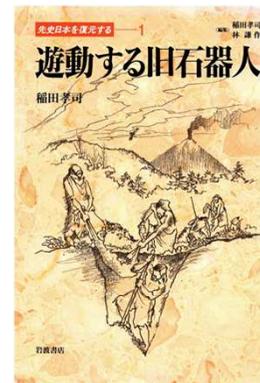
日本先住民到来以降の日本・九州の主な出来事-2

- 鹿児島・薩摩湾の北側に上野原遺跡誕生。9千5百年前。耳取遺跡の西側近く。
 - 7千3百年前、鬼界カルデラ大爆発でアカホヤの被害を被るが、人と遺跡は継続。
 - 熊本・長崎には、縄文人の住居遺跡拡散(甕式土器)。長崎には丸のみ型石斧多し。
 - その後、鹿児島から福岡県まで黒川式土器(黒色磨研土器)が拡散。
 - 九州北部まで、縄文人の住居と遺跡が拡散し、焼き畑農業が行われ、米、ヒエ/アワ、豆など栽培。
- 鹿児島の広田遺跡の南九州型縄文人が、北部九州の大友遺跡などには西北九州縄文人が、後の弥生時代まで存在した。西北九州縄文人は、鬼界カルデラ爆発以降に九州に移住してきた沖縄から来た先住民と推定する。
- 2千五百年ほど前、西北縄文人は、朝鮮半島南部の松菊里遺跡(BC500)に渡来していた水田稲作を渡来民と共に日本へ導入し、菜畑・曲り田・板付遺跡などで水田稲作を開始した。支石墓も導入し、墓制を変えた。
 - 水田稲作は数百年をかけて、瀬戸内海から大阪平野まで拡散した。
- 2千2百年ほど前、弥生渡来人が、大挙到来し、集落を作り、水田稲作地の開拓を開始した。
 - 西北縄文人とは、土地争いが発生し、戦争も発生したが、勝ち、弥生渡来民が、縄文人を混血し、水田稲作をベースに集落を拡大した。
- その後は、記紀神話にある高天原・天孫降臨・出雲国譲り・神武東征・大和政権誕生へと継続した。
- 始良カルデラ爆発で、人のいなくなった九州・四国・中国地方に、再到来したのは、海洋民族である沖縄・旧石器人で、九州から人口を増やしていった。
- 鬼界カルデラの爆発で、南鹿児島は、再び人がいなくなり、人口減少した九州北部へ渡来したのは、再び沖縄の住民と考えられるが、顔付などが、異なる処があった。大友人とも云われた西北九州縄文人で、縄文人と弥生渡来民の血が混じったとDNA判定された人々になる。



後期旧石器時代の遺跡数と人口動態 日本列島において4万から3.5万年前の環状ブロック群の遺跡は81か所(橋本2005)、2万から1.5万年前の細石刃石器群の遺跡は1792か所(堤2003)が発見されている。後期旧石器時代の2.5万年間で25倍の遺跡数の増加がうかがえ、一定の人口増を物語るデータである。

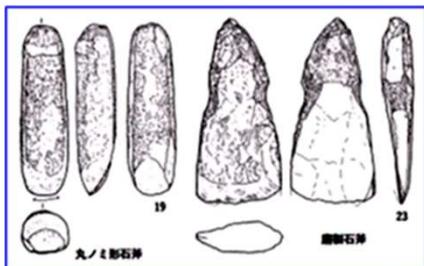
堤 隆著「列島の考古学-旧石器時代」
河出書房 より



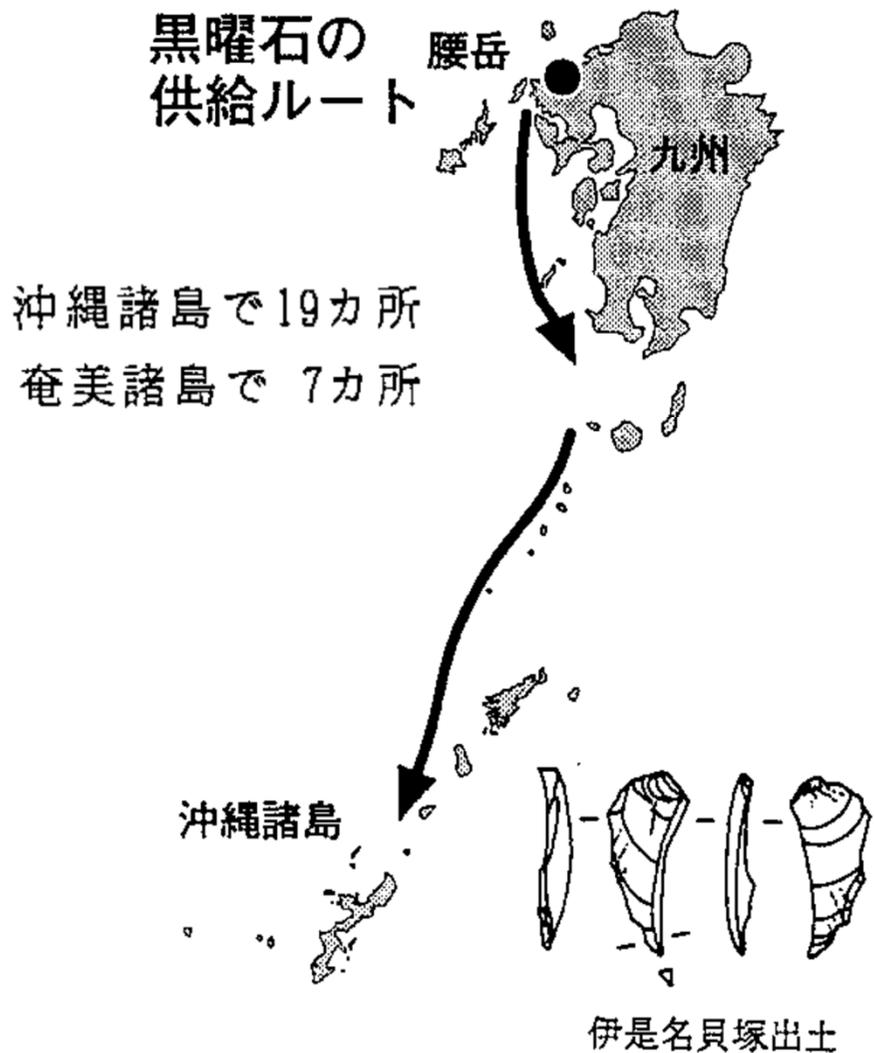
神澤秀明氏の講義資料より

沖縄の旧石器人・縄文人の本土渡来

- 3万年前の日本を襲った悲劇は始良カルデラ爆発による、火砕流と火山灰の被害で、九州から中四国までの旧石器人は、絶滅したこと。
 - 近畿地方・中部地方・関東地方まで火山灰が降り、被害があった模様。
 - 被害の無かった・少なかった地方は、沖縄列島・朝鮮半島及び、東北・北海道
 - 被害を被った九州・中四国の自然回復後に、再び訪れた人々は、海洋民族の沖縄列島の旧石器人と推定される。
 - 東北地方から半島地方へ遊動していた旧石器人は、関東地方から中部地方まで移動・移住。
 - 東北地方から日本海沿いに、北陸・近畿・中国地方まで進出した。
- 九州・四国までの地域は、沖縄から到来したと考えるのが妥当な推定。
 - 縄文人のミトコンドリアDNAの分布は沖縄・九州・中四国までは、M7a1で同一なもの。中部地方から関東・東北までは、別系統になる。この分布図からも、沖縄から九州・中四国への渡来は裏付けられる。
- 沖縄から九州・本土への移動の手段は、下記のサバニ丸木舟又はその祖先系丸木舟。
 - 鹿児島島の梶ノ原遺跡には、丸木舟製作用の丸ノミ型石斧が出土



黒曜石の流通 (12,000～ 2,000年前)



南島爪形文土器文化 (7,000～ 6,500年前)

爪形文土器タイプ

奄美大島 60
61
62
喜界島

徳之島 63

沖永良部島 64

○与論島

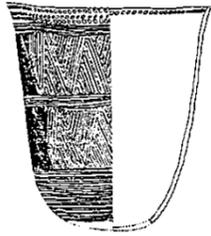
65 仲泊 沖縄本島
66 大久保原 本島
67 渡具知東原 本島
68 ヤブチ洞穴 本島
69 野国 B 本島
70 城間古墓群 本島
71 船越原 渡嘉敷島

60	喜子川	"	奄美大島
61	宇宿高又	"	奄美大島
62	土浜ヤーヤ	"	奄美大島
63	面縄第1	"	徳之島
64	中甫洞穴	"	沖永良部
65	仲泊	沖縄	本島
66	大久保原	"	本島
67	渡具知東原	"	本島
68	ヤブチ洞穴	"	本島
69	野国 B	"	本島
70	城間古墓群	"	本島
71	船越原	"	渡嘉敷島

南島爪形文土器の出土遺跡

曾畑式土器文化

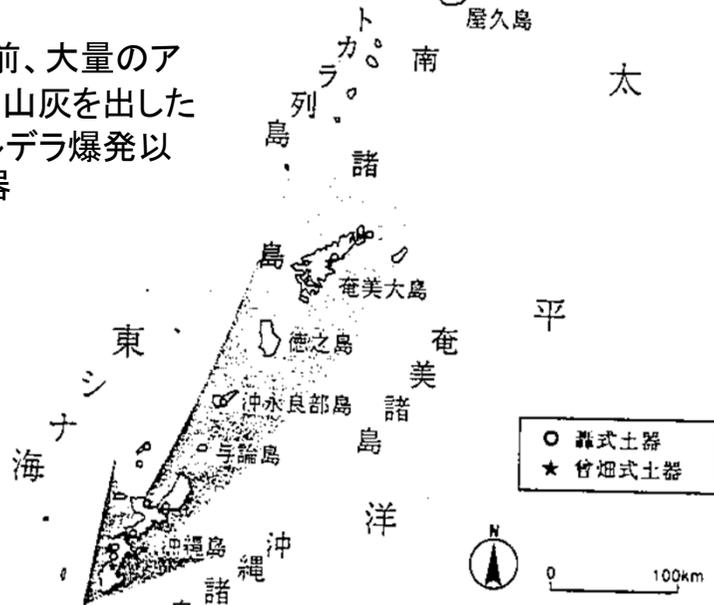
(6,000~ 5,500年前)



曾畑式土器



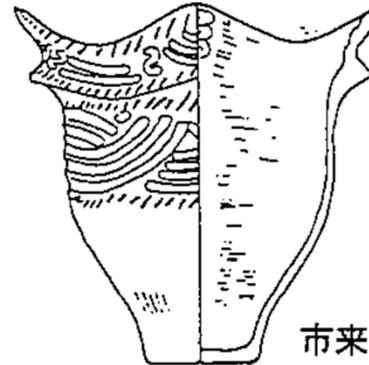
6,300年前、大量のアカホヤ火山灰を出した鬼界カルデラ爆発以降の土器



曾畑式土器の伝播

市来式土器文化

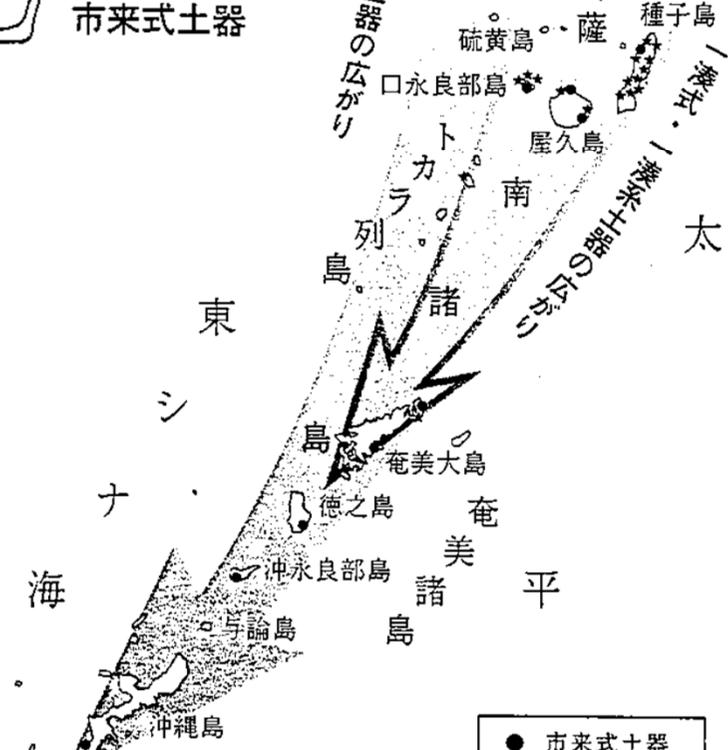
(3,500~ 3,000年前)



市来式土器



市来式土器の広がり
トカラ列島
南諸島
奄美大島
徳之島
沖永良部島
与論島
種子島
硫黄島
薩
屋久島

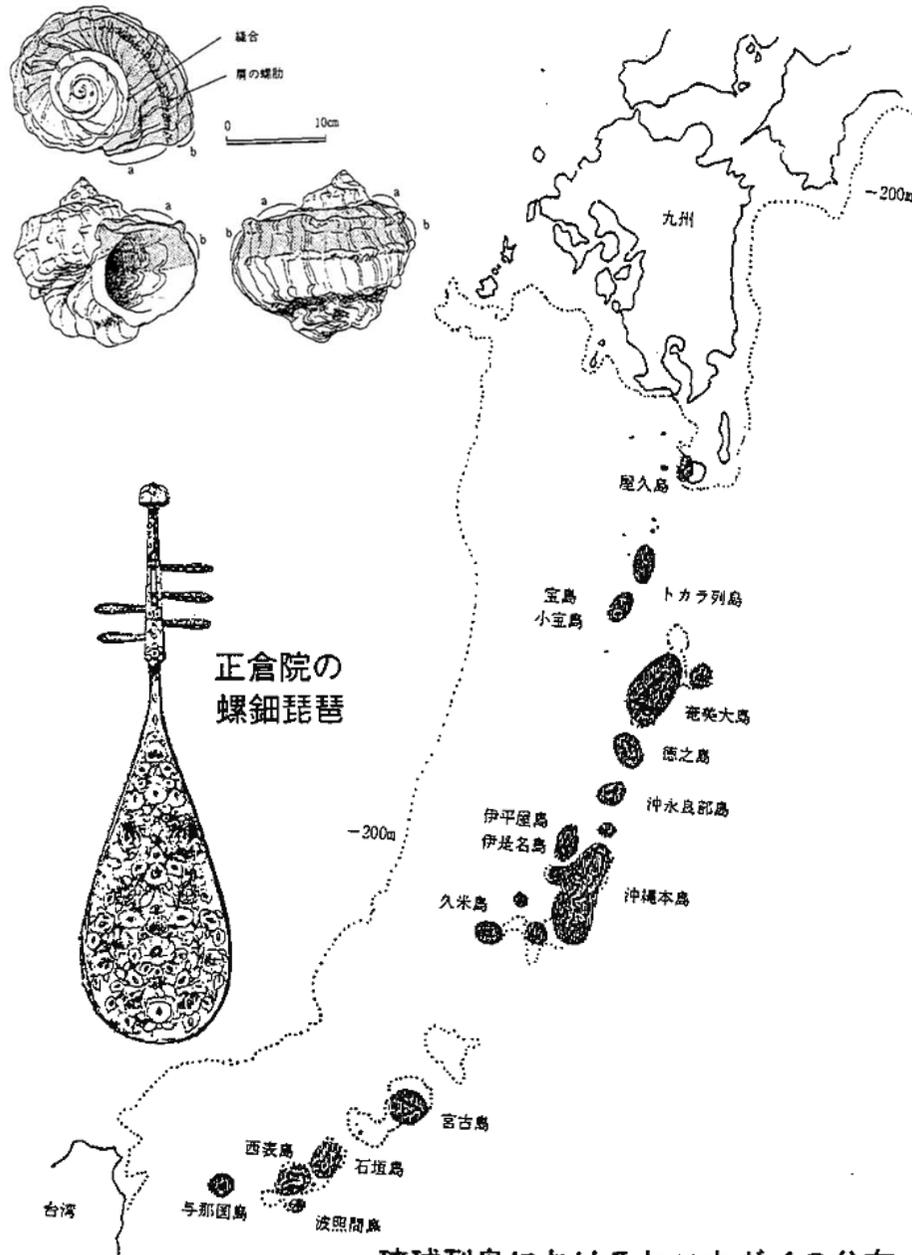


沖縄諸島

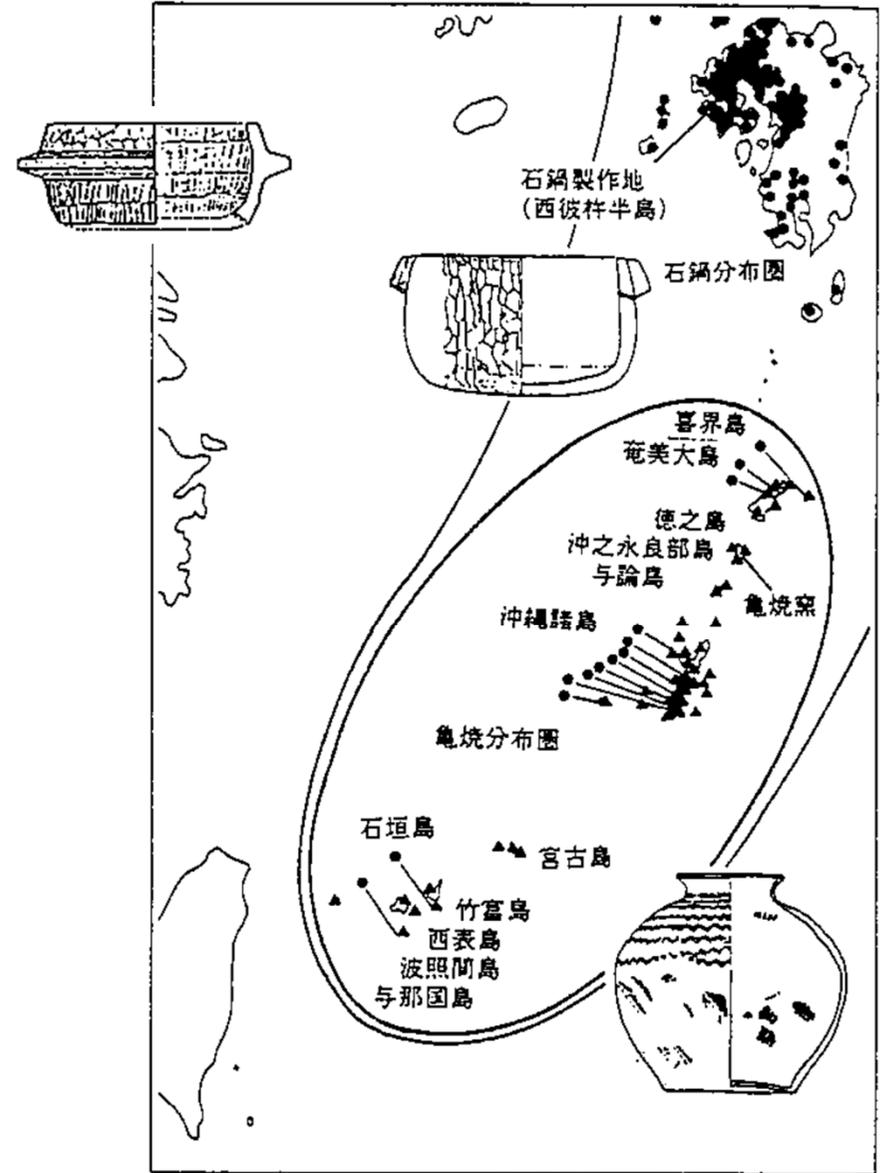
- 市来式土器
- ★ 一湊式土器
- 一湊系土器

ヤコウガイの交易 (7~14世紀)

滑石製石鍋・カムイヤキ交易 (11~14世紀)



琉球列島におけるヤコウガイの分布



亀焼と石鍋の分布図

中国の黒陶が九州で出土

- 河姆渡文化(7000～6500年前):黒陶・灰陶など、1000度以上の高い温度で焼いたものが見られる。粳穀と稲、葦の茎と葉を炭化し、陶土に焼いたもの。黄河域の龍山文化期(5000～4000年前)の黒陶より以前。轆轤(ロクロ)で成型、表面を研磨し光沢を出した。



黒陶釜
河姆渡文化



大石遺跡・大分県豊後大野市
別府大学付属博物館所蔵

- 九州・熊本の複数遺跡で「縄文後期黒色研磨土器」が出土 (賀川光夫氏の同名レポートによる)
- 熊本県菊池市天城遺跡、福岡市四箇遺跡、大分県駒形遺跡、長崎県筏遺跡、宮崎県陣内遺跡など
縄文時代後期後半から晩期

(3200～2400年前)

- 周湟(溝・堀)で囲む集落構造を持つ
- 甕棺で埋葬(小児)
- 石包丁・石斧
- 天城遺跡では、米のプラントオパール検出
(鹿児島市から南へ533kmの徳之島の遺跡)

【後期磨研土器Ⅰ式(三万田式)の集落立地と遺物】

	遺 跡	立 地	集 落			石 器			石 棒 そ の 他	土 偶
			住居	溝	カメ棺	打製 石包丁 (石鋸)	石斧 (石鋸)	石鎌		
1	三万田	低丘陵	○	○	△	◎	○			○
2	天城	低地	○	○	◎	◎	○		△	○
3	四箇	低地	△	○	○	○				
4	筏	低丘陵	△	△	◎	◎	○			
5	駒形	高地	△	△		◎	○			○
6	陣内	高地				◎	○	○	○	○

◎ 多数 ○ 普通 △ 存在

古代の「中国と沖縄・日本」の交流

- 二本の米・稲作に起源について：
 - 日本の古代米＝熱帯ジャポニカ米の、中国より 沖縄諸島へ入り、日本本土へ拡散
 - 日本の米の最も古い痕跡は、岡山で発掘された6400年前の稲プラントオパール
- 漆について：
 - 日本では、12,000年前に漆の枝が遺跡から見つかり、7000年前の漆製品が出土。
 - 中国の河姆渡遺跡では、約6200年前に漆椀が発掘された。
- 翡翠について
 - 約5～6000年前の土器と共に、ヒスイのペンダントが山梨県天神遺跡から出土。→
 - 約3500年前の沖縄県兼城上原遺跡から翡翠が出土。新潟県糸魚川産の翡翠と判明。
 - 崧沢文化(紀元前3800年? - 紀元前3500年?) 玉による装飾品
 - 良渚文化(紀元前3500年? - 紀元前2200年?) 多数の玉器。
- 玦状耳飾の流行
 - 河姆渡遺跡などで6000 年前から4000年前まで、
「玦」が流行し、衰退
 - 縄文時代前期(6000 年前から4000年前)に同様に流行し、
衰退



「山形県内出土の玦状耳飾について」 小林圭一著より

時期	類型	浮輪形	金環形	「有明神社」型	指貫形	円盤形・玦状	三角形	楕円形
	早期	後葉						
前期	初頭							
	中葉							
	後葉							
	末葉							
中期	初頭							
	中葉							

図1 玦状耳飾編年模式図 (川崎 2004) 改変



沖縄と九州・本土との交易

- 「沖縄と本土との交流-1～3」、「中国の黒陶が九州で出土」、「古代の「中国と沖縄・日本」の交流」により、沖縄と九州・本土との交易・交流は、1万2千年前から継続して行われてきたことが判明。
 - 従来の沖縄関連の学会資料では、「旧石器人絶滅」した沖縄諸島に、九州から縄文人・弥生人が運んだとの評価になっていたが、「絶滅」が否定されたため、沖縄と九州・本土との交易との評価が確定した。
- **翡翠(ヒスイ)**については、3500年前のヒスイが出土したことは、沖縄人が日本海を經由して糸魚川のヒスイを輸入したことになる。
 - ヒスイは、宝石の硬度を示すモース硬度で6.5～7で硬い。水晶よりは硬度は低いが、**韌性(じんせい)**が強く、ダイヤモンドより韌性の強いサファイアを上回り、**宝石の中では一番割れにくい石**です。
 - 現在は、東南アジア産などが有るが、歴史的には、日本の糸魚川産が唯一使用された。
 - 縄文時代のヒスイは穴明け加工されているが、硬い石に垂直に穴を明ける技術は、日本にしか存在しなかった。(垂直にドリル・工具を立て、回転する“工具”を作成。(火を起こす回転式道具に類似)ドリル・工具の代わりに竹・木材を使う。ドリル・工具の代わりに、**研磨粉を水で溶き竹・木材の工具とヒスイの間に注ぎながら、回転によって、研磨粉の粒子が、ヒスイの表面を削る**。この作業を根気よく行うことで、ヒスイに、垂直に穴が開く。研磨用には金剛砂(柘榴石の粉)を使う。糸魚川から近い、長野県和田峠・霧ヶ峰付近に金剛砂の産地有り。
 - ヒスイの穴明け作業の秘密(上記)を知ることが出来れば、特別な力を得ることになる。
 - 中国の崧澤文化(5800年前～5500年前)の玉製品の加工技術は、沖縄経由で伝わった可能性あり。
- 漆(ウルシ)は日本では12,000年前から実用化
 - 鳥浜貝塚(福井県)でウルシの木が出土
 - 7000年前に中国河姆渡遺跡で出土
 - この技術も、日本から、沖縄経由で伝わった可能性が有る。
- ✓ 沖縄の海洋交易によって、有用な技術や製品が、日本の日本海側から、沖縄へ、又更に中国の揚子江流域に伝わった可能性が有る。
 - ✓ 沖縄と中国の交易で最も重要度の高い製品は、宝貝と云える。その実態を探る材料を以下に記す。

宝貝



408 タカラガイ

貝	貯	財	賄
賄	賭	賞	賚
貨	貸	買	賣
質	購	贈	贄
賤	寶	贖	賴

一個の宝貝で、羊が5-6頭
(中国:殷・商の時代)

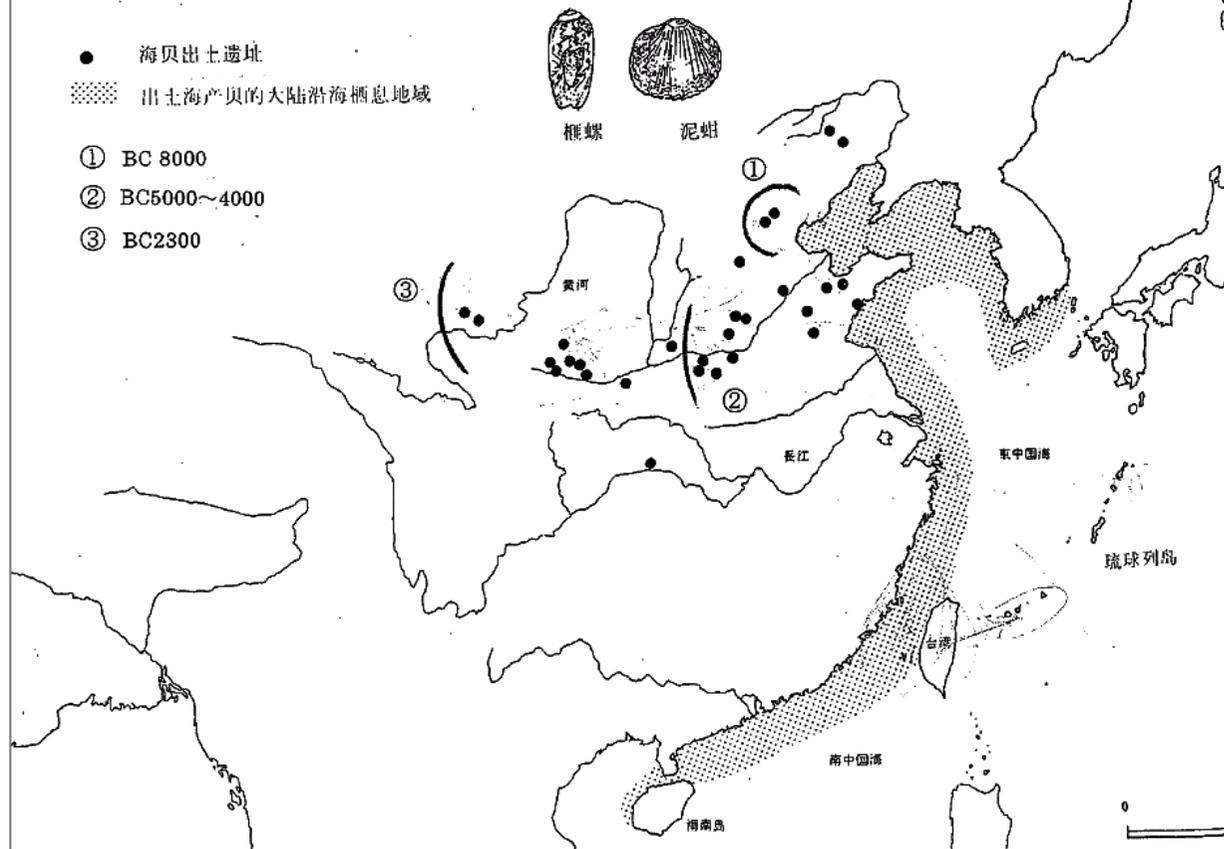
上と右 雲南出土の貯貝器
中国国家博物館名品展「悠久の美」より借用



宝貝の説明： 宝貝の歴史

- 古代中国で、最初から宝貝が珍重された訳ではない。外の多くの外の貝が、出土する。
 - 「宝貝と異なる種類の貝類」(写真の種類)： 北京付近の遺跡から10,000年前のもの、黄河沿いに地域から7,000～6,000年前のもの、更に黄河上流の地域から4300年前のものが出土。
 - 最初から、宝貝だけが、価値のある貝だった訳ではない。
 - 榧螺(マクラガイ)は、7000年前から黄河中流域に出現し、2200年前頃、殷墟でも大量に使用されたことがある。この貝は、黄海南部-海南島北部で大量の捕獲される。
 - 何が？キイロダカラ=宝貝の一種を、価値のある宝貝→威信財・通貨とさせたのか？

图5 古代中国宝貝以外的海産貝分布及大陸沿岸栖息域
(新石器时代~春秋时代、BC8000~BC400)



榧螺(マクラガイ)

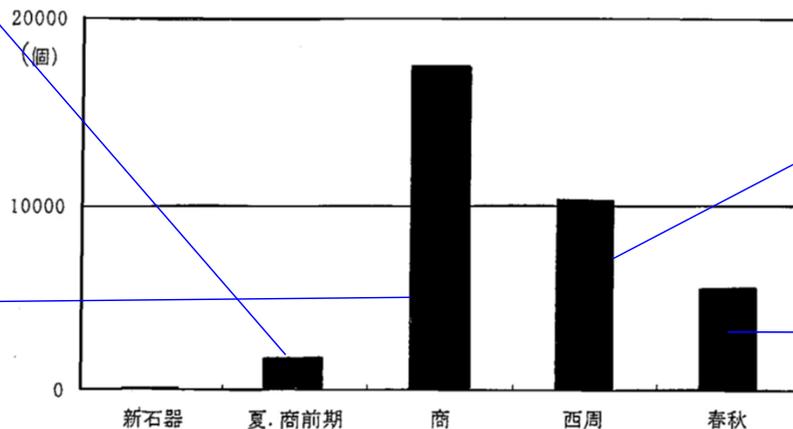


熊本大学 文学部
 木下尚子著
 「中国殷代宝貝の流通
 と琉球の關係」より

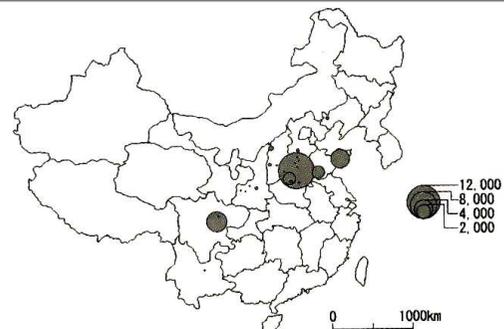


宝贝は夏の時代から急増

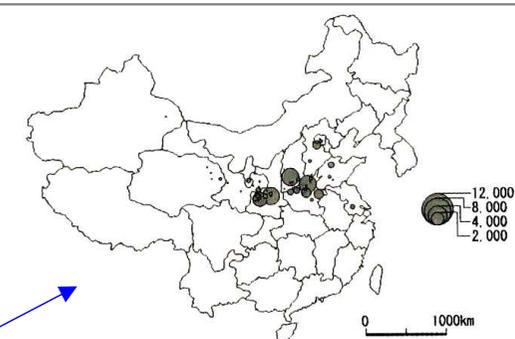
图 2 中国宝贝消费动向(出土个数 总数 35096 个)



〔図 2〕 殷代以前の宝贝・倣貝出土地

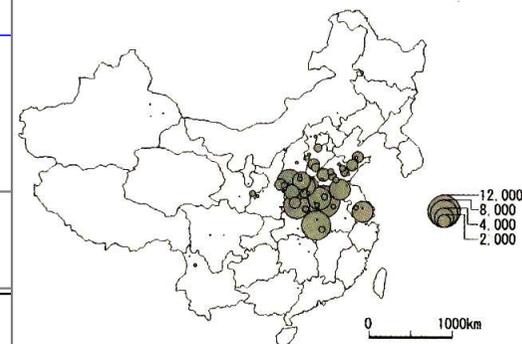


〔図 3〕 殷代の宝贝・倣貝出土地



〔図 4〕 西周時代の宝贝・倣貝出土地

89 第四節 殷周宝贝文化の拡散

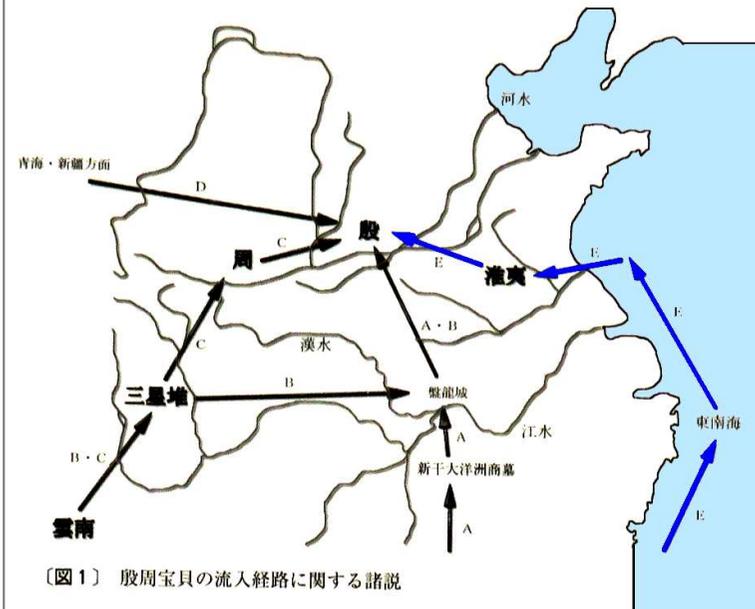


〔図 7〕 春秋戦国時代の宝贝・倣貝出土地

上記グラフは木下尚子著の中国殷代宝贝の流通にと琉球の関係より

図2-4,7 は、柿沼陽平著「中国古代貨幣経済史研究」より

- キイロダカラ・宝贝は、夏王朝以前の新石器時代から出土する。
 - 夏王朝の時代から、量が増え、中原に広がる。
 - **商(殷)の時代に最高潮に達し、周、春秋の時代にも継続する。**
- 「外の美しい貝類」や「外の種類の宝贝」が、10,000年も前から貴重なものとして扱われてきた中で
 - キイロタカラガイが、唯一の威信財・通貨となるには、何か特別な要因があったのか？
 - **外のものとは異なる要素は:「均一なサイズと品質」**
 - キイロタカラガイは、成長とともに、9ミリから45ミリの範囲の大きさになる。中国の宝贝とされたものは、25mmの均一な大きさと品質が均一だった。(上田信 記)
- 夏や殷の王が、この「キイロタカラガイ」の「均一なサイズと品質」供給の提案を受けて、王がこれを採用し、臣下と与え続けることで、キイロタカラガイが、人々から唯一の威信財・通貨としての位置づけを受けたものと考えられる。



〔図1〕 殷周宝貝の流入経路に関する諸説

宝貝の供給ルート

キイロタカラガイの供給ルート
ハナビラダカラのルートはやや異なる

柿沼陽平著「中国古代貨幣経済史研究」
の図表に海と矢印の部分に着色したもの

- 柿沼陽平氏は「中国古代貨幣経済史研究」中で、
 - 東南海沿岸→淮夷(山東半島を含む)→中原が妥当とする。
 - 又、殷・周王権にとって、「宝貝の流入経路上に位置する淮夷との関係はまさに死活問題であった」とも云い、淮夷と宝貝に関する史料を3点を示す。
 - 淮夷が流通に関ったことを示唆
 - しかし、淮夷と戦い、宝貝を含む財貨を略奪したとのエピソードは、疑問を抱かせる。
 - 王族に宝貝を供給するルートを握る淮夷と、戦い・争うことは、ルートを失う、避けるべき行為。
 - 宝貝を供給したルートは、淮夷に近い処に居る別グループを示唆する。
 - 徐夷など外の東夷か？
- 木下尚子氏は、科研の報告書概要「琉球列島間のタカラガイ需要・供給に関する実証的研究-新石器時代から漢代まで」の中で、
 - 山東半島に、安陽殷墟と同様の貝類組成をもつ商周代の遺跡があり、貝殻の出土状況の検討から、この地の人々が中原への貝類流通に関わっていた可能性が高い。と記す。

中国宝貝の流通ルート

- 中国・中原に近いルートは、山東半島付近の、淮夷ではない夷族が、取り扱ったと推定。
- 宝貝の供給した産地は何処か？
 - 熊本大学の木下尚子氏は「中国殷代宝貝の流通と琉球の関係」の中で、
 - 『中国の宝貝の消費がピークに達する殷代の時期に、大陸・台湾共通の文物～貝珠、骨製ブレスレット、蝶形製品、獣形製品～が、琉球列島に出現すること』を示し、琉球が産地である可能性を示唆している。 → [この説に共鳴する](#)。
 - 宝貝自体の産地については、同上の論文では
 - 出土する全ての種類の宝貝を、沖縄では産出していない。
 - 従って、沖縄(琉球)以外に産地がある可能性を残している。 との事
 - しかし、沖縄で全ての宝貝の品種が揃わないことは、通貨等に使われた品種が沖縄産であることとは、無関係の議論で、「沖縄(琉球)以外に産地がある可能性を残している」との記述は意味が無い。
 - 特定の亜種を養殖した場合、養殖を止めた後は、同一の亜種は消滅し、産出しない可能性が大きい。養殖であることを認識していない見解と考える。 [流通させた宝貝は、美しく、同一模様、同一サイズの亜種と推定する。→偽札防止策](#)。
- 三星堆では、同じ遺跡からキイロダカラとハナビラダカラが出土する。
 - 殷からキイロダカラを入手し、同時に、当地で使われていたハナビラダカラも蓄えていたことを意味する。
 - 殷時代には、キイロダカラとは別に、雲南・四川にはハナビラダカラが供給されていたことになる。
 - ハナビラダカラも、均一のサイズと品質を保っていた。
 - 古代中国で流通した二つの宝貝は、[サイズ・品質の均一性を考えると](#)、同一グループによる、生産・供給の可能性が大。
 - 後世の元・明の時代の証拠から、ハナビラダカラは、沖縄産と判明。
 - 従って、二種の宝貝は、共に、沖縄から供給されたとするものの合理性が高い。

宝貝の生育→養殖

貝の考古学 忍澤成視著より

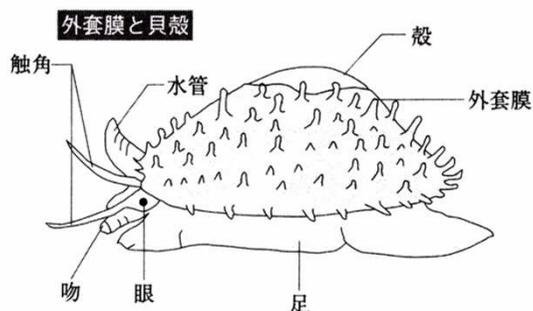


図2 タカラガイ生貝のようす
(池田ほか 2007)

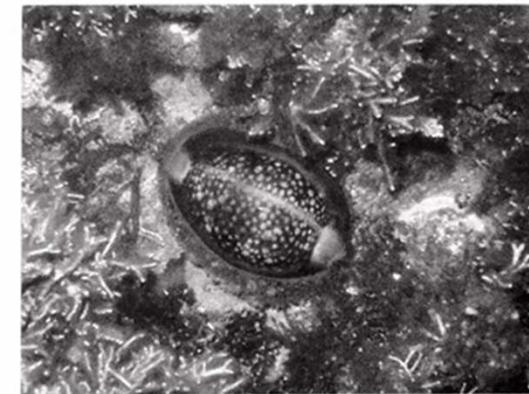
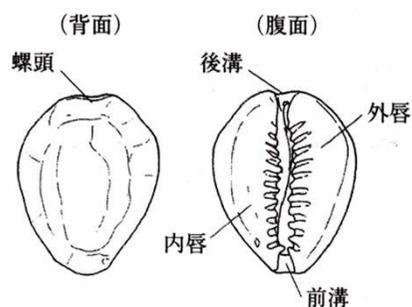


図3 タカラガイの生態写真 (伊豆大島・泉浜水深1mにて撮影)
左：外套幕に貝殻が覆われたオミナエシダカラ 右：貝殻表面が露わになったハナマルユキ



<模式標本：キイロダカラ>

図1 タカラガイ類貝殻の部分名称 (模式標本・キイロダカラ)

タカラガイは、
幼貝段階の殻長の大きさが、
成貝の大きさを決定してしまうという特徴がある。
大きさの違いは齡差ではない。

- 宝貝の特徴は、養殖で均一な宝貝を得るのに良好。
- 産卵から、又は稚貝=種苗(しゅびょう)を採取して、環境の同じ場所で幼貝まで育成した後に、自然環境の撒き、生育すると、均一のサイズの宝貝に育つことになる。
- 中国中原の貨幣となった宝貝は、特定の海域で、人工的に、養殖され、加工されたものと推定される。

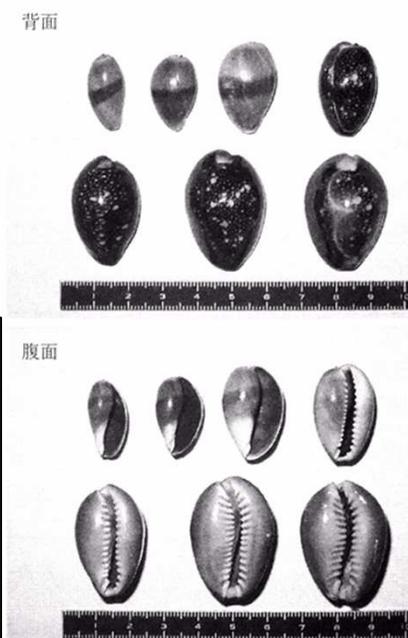


図5 タカラガイ貝殻の成長過程(ハナマルユキ)
図の左から右に向かって徐々に成長する。
上段：幼貝～未成貝段階 下段：成貝段階

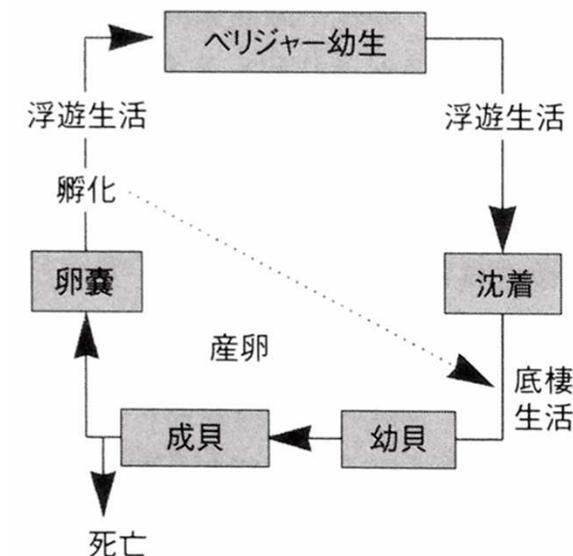


図4 タカラガイの生活史
(池田ほか 2007)

寶貝の流通地域と産地



キイロダカラ



ハナビラダカラ

- 寶貝の品種
 - 殷・周・春秋戦国に使用された寶貝はキイロダカラ
 - 四川省・雲南省では、ハナビラダカラ
- 産地は不明とされてきた。
- 候補地は：モルディブ、タイ湾、沖縄が挙げられる。

- 元の時代に、寶貝が通貨と使用されていた。
- 明の時代1434年には、寶貝交易の記録が、琉球王朝の外交資料『歴代宝案』中に、明瞭に残されている。
 - 『元史』『世祖本紀』には「1282年、雲南で賦税を定めるに辺り、金を規準とし、貝で換算して収めさせた。
 - 『元史』『食貨志』に1382年雲南省から納められた税収が「20万1千1百17索」。税収とタカラガイは莫大な数。
 - 『歴代宝案』によると、1434年の朝貢に際して琉球の使節は〈海巴〉(タカラガイ)の規定の量550万個と、追加分として38万8465個を福建に持ち込んでいる。
 - 1611年に濟州島に漂着した船のエピソード：漂着船にはタカラガイなどが積載、船に満載された宝物に目を奪われ、乗組員を虐殺して「貝貨」(貝と貨物)を没収した。

中原地域と四川・雲南地域の差

中原地域(キイロダカラ)

- 紀元前3000年(5000年前)
 - 馬家窯文化 墳墓から陶器と共に寶貝(キイロダカラ)出土
- 紀元前2100年頃-前1600年頃
 - 二里头文化(夏王朝) 内モンゴルの大甸子遺跡で墓地から659個寶貝(キイロダカラ)出土
- 紀元前1600年～前1050年頃
 - 二里岡文化(商・殷王朝) 鄭州商城の墓より寶貝100余り 外の墓より93個。その他出土あり。
 - 婦好(商23代王部丁の妻)の墓より6880個
- 紀元前1100年～前771年
 - 周王朝
 - 寶貝の使用が続く
- 紀元前770～前221年
 - 春秋戦国
 - 寶貝の使用が続く
 - 銅貨が使用開始
- 紀元前221年～前206年
 - 秦、寶貝を廃止



四川・雲南地域(ハナビラダカラ)

中原では古代より廃止されるまでキイロダカラと云う寶貝の品種が使用された。
四川省・雲南省ではハナビラダカラと云う違う品種が使われた

三星堆の青銅器は紀元前1300年のものと測定されている

- 三星堆・祭祀二号から4600枚
 - キイロダカラが少数
 - ハナビラダカラが大多数
- 琉球グスク・三山時代
- 1372年 中山の察度明朝に朝献
- 1392年 閩人三十六姓舟を操る人を明朝が、琉球・中山に派遣
- 1404年中山の武寧朝献
 - 1416年までに北山を1429年 南山を滅ぼし琉球王朝統一
- 1434年琉球、明国へ朝献貿易寶貝550万個(+約39万個)納入(雲南省向けハナビラダカラ)
 - 1633年 宮古島を津波が襲う
- 1639年オランダ商館 琉球産寶貝入手拒絶さる
- 17世紀半ばより寶貝の価値暴落

長期間、通貨となった宝貝ビジネスの仕組みの推定



• 古代王朝の要求(古代国家の大蔵省)

- 通貨としての均一な品質の維持
- 要求数量の安定供給
- 機密保持
- 唯一のルートでの維持

宝貝納入窓口 (古代の造幣局)

- 古代王朝との窓口交渉
 - ✓ 対価の要求
 - ✓ 納入期日・数量の交渉
- 遠く離れた生産者との通信・運輸
 - ✓ 外洋航海の可能な船舶・航海技術を保持し、生産地域との往復を行い、
 - ✓ 数量・品質要求を指示、製品の運搬を行う。
- 古代王朝変換期には、新王朝との交渉を実施。

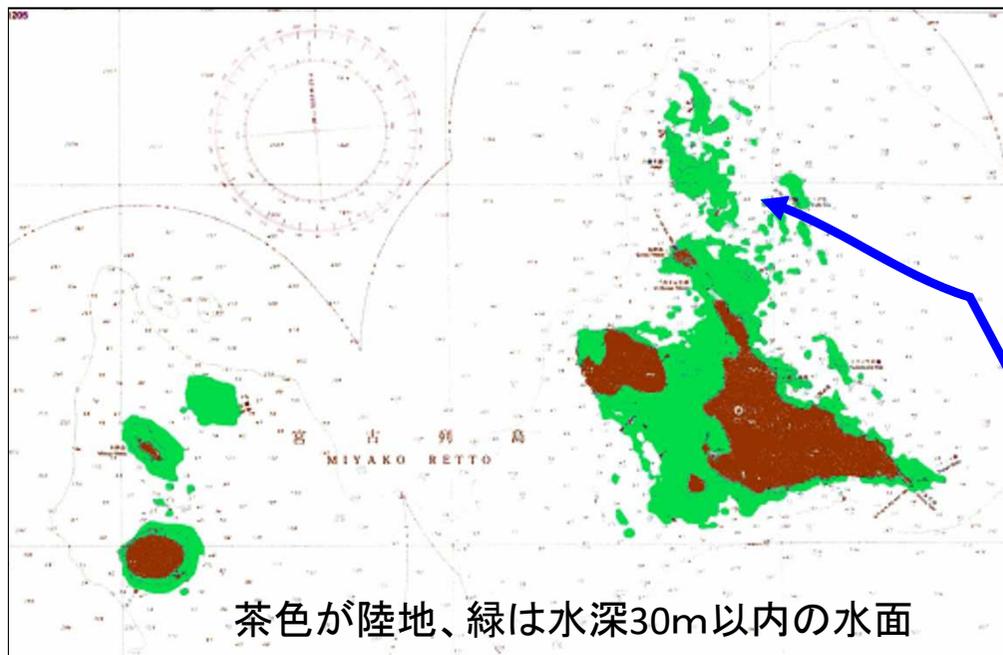
• 琉球側の交流地点 (那覇・琉球政府?)

- 那覇港付近にあり、大量のタカラガイなどを貯蔵し、貿易船に積み込む。
- 養殖・生産地の宮古島から那覇港に運び、そこから、中国本土へ運んだ。
- 生産地の宮古島を機密とし、隔離した。

• 生産地 (宮古島)

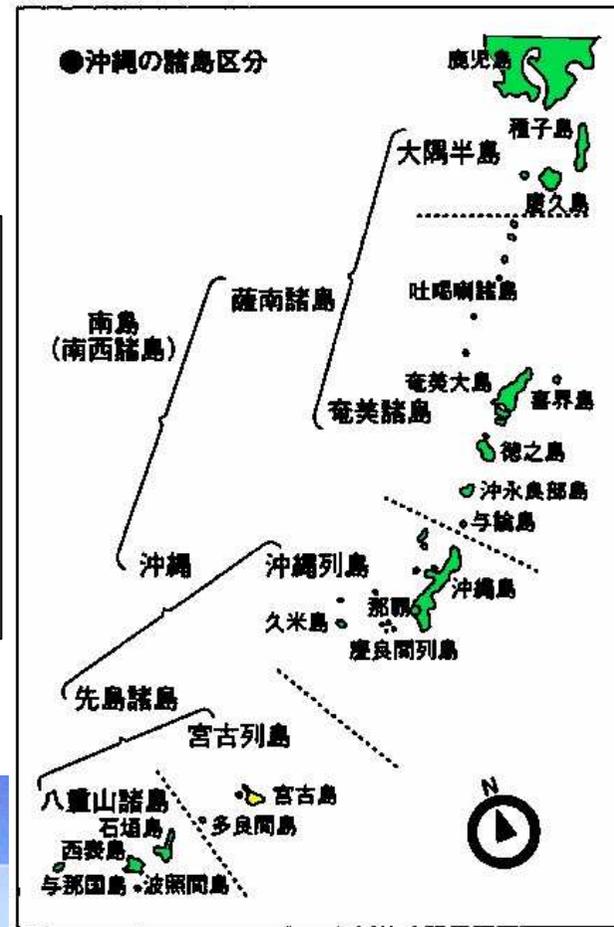
- 最適な生産地を占領し確保
- 窓口との緊密な関係を保持
- 大量で均一なサイズ・品質の宝貝を養殖する技術と加工技術を維持
- 養殖の技術も、生産自体も秘密とした

宝贝の養殖地：宮古島



宮古島付近の海図：
 緑色は水深30m以内。
 伊良部島・下地島との
 間には広い浅瀬があり、
 北方には、大潮の時に
 島のようになる岩礁が
 広がる八重干瀬(やび
 じ)がある。

八重干瀬(やびじ)



2017/07



中國で出土した宝貝

安阳妇好墓的货贝 C型・D型

キイロダカラ

婦好墓の貨貝 C:有疑問貨貝 (010828)



Cypraea (Erronea) caurica 厚縁擬枣貝 **カバフダカラ**
 Cy. caurica カバフダカラ 2000AGM5092 (010831)



Cy. caurica
 H1107 2005
 2000 AG 5092
 010831

Cypraea (Monetaria) annulus 杯紋貨貝 **ハナビラダカラ**

Cy. annulus ハナビラダカラ 2000AGM5092 (010831)



Cypraea (Blasicrura) quadrimaculata 四斑呆足貝 **ヨツメダカラ**

Cy. quadrimaculata ヨツメダカラ 2000AGM5092 (010831)



平成 13~16 年度科学研究費補助金基盤研究(B) (2) 海外研究成果報告書
 Report of Grant-in-Aid for Scientific Research (B) for 2001~2004
 研究課題番号 Project Number 13571038

中国・琉球列島間の
 タカラガイ需要・供給に関する実証的研究
 —新石器時代から漢代まで—



March 2005

研究代表者 木下尚子
 Head of Project KINOSHITA Naoko

熊本大学文学部
 University of KUMAMOTO

木下尚子氏は、科研の報告書
 「琉球列島間のタカラガイ需
 要・供給に関する実証的研究-
 新石器時代から漢代まで」

中國で出土した寶貝について

- 木下尚子氏は、科研の報告書「琉球列島間のタカラガイ需要・供給に関する実証的研究-新石器時代から漢代まで」
- 前頁の4組の寶貝の写真中で、上の「キイロタカラガイ」と「ハナビラダカラ」は、正規に通貨として流通していた物
下の「カバフダカラ」と「ヨツメダカラ」は、そうでないもの。
- **正規流通した「キイロタカラガイ」と「ハナビラダカラ」は、「明けられた穴」の位置・形状・サイズが均一。**
- 正規流通しなかった「カバフダカラ」と「ヨツメダカラ」の穴は**不均一でひび割れが入る代物**。
 - 寶貝は流通時に、80個の寶貝の穴に紐を通し一つの単位としていた。
 - 正規流通の寶貝の特定の位置に、均一の形状で開けられていた。
 - 非正規流通品は、穴の位置・形が揃わず、ひび割れが起きる不適切な穴明けしか出来ていない。
- 金属器の無い時代に、硬い貝殻に一定の形状の穴を明ける技術を持った人々は、南洋諸島に、普通は住んで居なかった。
- 沖縄の寶貝に関しては、事情が違っていた。
 - **寶貝の生産は養殖で、品種・サイズ・模様もほぼ均一。**
 - **穴明け加工も均一に実施。**
 - 糸魚川のヒスイの穴明け加工技術を手に入れた沖縄の交易者が、寶貝の穴明け用の道具と技術を開発したと推定する。その結果が出土品の均一の穴形状になった。
 - 貝殻の硬度は、一般的に3~4程度で、ヒスイの6.5~7の硬い硬度の穴明けの技術があれば、確実に可能であったと推定。
 - 沖縄以外の地域では、このような高度な技術を持てなかった為、非正規品の寶貝では、ひどい穴となっていた。

木下尚子氏は、科研の報告書

- 「琉球列島間のタカラガイ需要・供給に関する実証的研究-新石器時代から漢代まで」では、出土する全ての種類の宝贝を、沖縄では産出していない。
従って、沖縄(琉球)以外に産地がある可能性を残している。
 - として、沖縄産であったことを断言していないのは、誠に残念なこと。
 - 木下氏は、宝贝が養殖された貝であることの認識が無かったと推定する。
 - 自然状態の宝贝を探し求めて、通貨とした宝贝が無かったことを理由に、沖縄が宝贝の生産地と認定できなかったと推定される。
 - 正規で流通した宝贝は、大きさ、形状、色つや、模様も同一のもの。
 - 貨幣であるためには、必須の条件。
 - 沖縄にある沢山の島々の高貝生息地で宝贝を採り、それを選別したのでは、正規流通の宝贝にはならない。自然状態では、貝のサイズも違い、模様も、色も違う。
 - 宝贝は特定の地域(浜)で幼貝の時期を過ごすと、サイズが決まると云う特性を持っているため、養殖を上手に行うと、同一サイズの貝になる。(宝贝の生育→養殖の頁を参照)
 - 更に特定の貝の子孫だけ選んで養殖を複数世代重ねると、サイズだけでなく、色艶、模様も同一のものが出来る。
 - そのような選択的な養殖を行うことで、宝贝の均一サイズ、色艶、模様のもので出来た筈。
 - 秦の始皇帝の宝贝廃止に伴い、キイロダカラ宝贝の養殖を廃止した場合、養殖する品種を揚子江上流向けのハナビラダカラに切り替えた場合、キイロダカラの種は消失し、その養殖場だけでなく、沖縄近辺の海からも消失したと推定される。キイロダカラガイの存在をそれ以降、現在まで探しても、取れる可能性は無い。
 - 消失させるのが、養殖業者としては、適切な処置で有ると考える。
 - ハナビラダカラは、千数百年継続して、元・明の時代まで続いたが、1633年の大津波で宮古島が被害を被り、幼貝など、その品種を失った筈で、一切ハナビラダカラが取れなくなったために、宝贝ビジネスは消滅した。琉球王朝も薩摩藩も、中国側も、意に反して、中止せざる得なかった。
 - 従って、もう一つの正規流通の宝贝:ハナビラダカラも、その後→現在まで探しても、沖縄近辺では取れない筈。
 - 宝贝ではない大きさ・色艶・模様のハナビラダカラは、有るかも知れないが、本物は無い。

➤ 木下氏は、実物の宝贝遺物を観察する機会が有りながら、「穴明け加工」を見落としたことは残念。

寶貝の養殖と王朝への提供は誰が行ったか

- 寶貝の養殖と加工そして中国王朝への提供は誰が行ったのか？ 推測する。
- 沖縄が養殖地であるから、当初は、沖縄人(旧石器人→縄文人)が行った筈。 沖縄・九州/本土交易の沖縄人。
- 処が、養殖地と見なされる宮古島の住人のY-DNAは、O2b1(現在のO-47Z)で、弥生渡来人の主要部分と同じ。
(弥生渡来人の主要部分は、倭人のY-DNAを持つはずで、O2b1(現在のO-47Z)と推定される。)
 - 現在の沖縄住人のY-DNAは、縄文人のD2(現在のD-M64.1)とO2b1と漢人のO3(現在のO-M122)
- 寶貝の養殖は純粹の沖縄人が開始したが、ある段階で、中国側の窓口であったと推定される倭人が、沖縄に移住し、倭人が寶貝の養殖と加工を行うことになったと考えられる。
 - 中国国内で生活していた人が、主体性をもって、別の場所に来て生活する場合は、食料・土器・住居などの生活様式と言語をもって来るはず。
 - 倭人達は、稲作・土器・高床住宅などと共に、倭人の言語(日本語の祖語)をを沖縄にもたらした筈。
 - 縄文人と混血して現地化し、寶貝の持つ圧倒的な経済力の差で、母国語を倭人の言葉とした。
 - 沖縄移住の時期推定。
 - 中国側で寶貝が大量に使われ始める時期＝夏王朝の時代(4000年前)又は、それ以前か。
 - 日本で稲作の痕跡であるプラント・オパールが検出された時期は、岡山県の遺跡で、6400年前。
 - 黒川式土器(黒色摩健土器)が出土する時期は、鬼界カルデラ爆発(7300年前)以降
 - 韓国の半島南東部・対馬に近い加徳島の6300年前の人骨のDNAは、縄文人と弥生人の混血度合いに近い。(韓国の南岸部は、九州と同列の地域と理解)
- 倭人が寶貝の養殖と加工の為に、沖縄へ移住した時期は、7000年前頃と推定される。
 - 縄文人と倭人が混血し、言語は倭人の日本祖語が使われた。
 - 漢人の混血は、明朝から漢人が派遣された時期以降。

- 前頁に記された内容は、「日本人の起源」基本レポート等と合致しているか、確認する。
- 確認する内容は
 1. Y-DNA
 2. ATLウイルス
 3. GM遺伝子

第三章 ATLウイルスのあらまし



図12 ATL ウイルス抗体陽性の ATL 患者の日本国内分布 (1982年調). 大きい丸は10例, 小さい丸は1例.

カギとなる事象と論文:ATLウイルスの感染ルート

- DNA遺伝子以外にも、人の遺伝と同じように、子々孫々に伝わって感染してきたウイルスがある。このウイルスの感染ルートは、家族内だけ、つまり母子間と夫婦間に限定されている。
 - このウイルスはATLウイルスと云い、白血病を引き起こす。中公新書「新ウイルス物語」日沼頼夫著に記されている。
 - このウイルスのキャリア(感染経験者)は沖縄(琉球人)で33.9%、北海道のアイヌで45.2%で多く見られ、九州が7.8%とやや多く、四国一本州では1%未満のところが多く、東北では1%となっている。その外に、九州の宮崎県・鹿児島県・長崎県の離島海岸地域、四国・隠岐・紀伊半島南端・東北の飛島・牡鹿半島・山陸海岸などの僻地に多く発見された。
 - **日沼氏は**、現地調査を行い、非常に古くから居住し、人の混血の機会の少なかった、離島や半島先端などと、沖縄・九州・北海道に、キャリアが発生していることから、**日本の先住民がこのキャリアを持ち、その後、日本に、移り住んだ人が混血すると、キャリアにはならないことを示した。**
 - 世界的な調査が行われ、このウイルスのキャリアは、右の図の赤マークの地点で発見されている。
 - HTLV-1は中央アフリカから人類の進化拡大に伴って、縄文人や南米アンデスの先住民などに伝えられたと想像されている。(東嶋和子著「死因事典」p132)
 - 尚、韓国・朝鮮及び中国ではキャリアが発見されない。台湾の先住民にもキャリアは居ない。台湾のキャリアは日本人の移住者と思われる。東南アジアはまったくゼロではないが、ほぼ発見されない。
-
- ✓ **沖縄ではこのキャリアが多いがその中で宮古島には、このキャリアは極端に少ない。「宮古島の人、沖縄の他の島と違って、日本先住民ではないからだろう。」と日沼氏は記している。このことは、非常に興味深い。**
 - ✓ 宮古島のこと:大野晋氏のタミル語と日本語の記述に、宮古の言葉が引用され、古くからタミルと同じ日本語が使われてきたことを示している。このことから、沖縄・琉球人が日本古来の人でありながら、何故、渡来人の日本語を使ったのか疑問に思っていたが、宮古島が古来からの琉球人とは異なる人が住む島であったことが判り、古来の沖縄・琉球人≠タミル語を使う人と判明し、長年の疑問がここで解消された。
 - ✓ 松本秀雄博士の免疫グロブリンG(Gm)の分布では、宮古島は、アイヌと同じレベルの、古い集団であったとしている。
 - このATLウイルス調査の示された現象を説明できる日本人の起源論が望まれる。

Y-DNA

Y遺伝子 簡易表 日本・アジア
2014年10月Wikipediaより 抜粋・変換(100%換算)

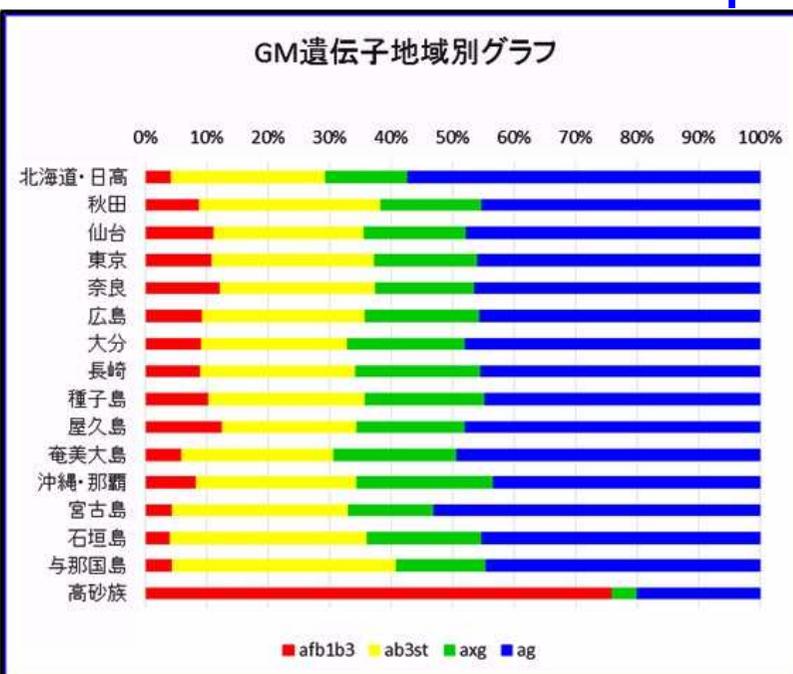
		C		DE			NO						
		C1	C3	D1	D2	D3	N	O1	O2a	O2b 1	O2b *	O3	
日本 (野中、水口)	日本	2	3	-	40	-	1	3	1	26	8	16	100
日本 (Tajima et al.)	アイヌ	-	13	-	87	-	-	-	-	-	-	-	100
日本 (Shinka et al.)	沖縄本島	4	-	-	65	-	-	-	-	14	-	17	100
	南沖縄	-	-	-	6	-	-	-	-	94	-	-	100
韓国 (Shin et al.)	韓国	-	10	-	-	-	4	4	-	-	32	49	100
東アジア北部 (Karafet et al.)	朝鮮	-	13	-	-	-	-	3	-	41	-	43	100
	漢民族(華北)	-	7	-	-	-	-	-	3	-	-	90	100

- 男だけに伝わる遺伝子「Y-DNA」を見ると、
 - D2がアイヌ・沖縄に多く、日本先住民＝旧石器人＝縄文人の遺伝子
 - NO系統が渡来系の人々のもので、特にO2b1は弥生渡来系の主軸の遺伝子
 - 南沖縄(宮古島を含む先島諸島)では、O2bの倭人が大多数で、極少数の先住民がいる。
- 宮古島を含む南沖縄は、日本全体とは異なった、Y-DNAの構成を持つことが注目される。

Gm遺伝子の研究を行なった松本秀雄博士は、「宮古・石垣・与那国では、「赤(afb1b3)」が非常に少なく、アイヌと同じ古い・純粋な民族である」と記した。先島諸島では、古くからの純粋な民族が住み続けてきたことを示している。

Y-DNAとGm遺伝子の両方を検討すると、
『宮古島には、古い・純粋な倭人＝弥生渡来人がいる。』

「弥生時代に渡来した民族の仲間が、もっと早い時期に＝先に、宮古島に、移住していたこと」を示している。



宝貝交易を主導していた倭人の所在地

- 宝貝交易を主体的に管理運営していたグループ/ボスは
 1. 中国本土に居て、
 2. 各時代の王朝の財政責任者と協議
 - 通貨の量
 - 通貨(宝貝)の取引価格
 3. 沖縄の生産部隊へ指示
 - 生産・加工量
 - 搬入量・時期
 4. 人種は沖縄の生産・加工者と同じ倭人

- 宝貝交易のボス
 - 推定する所在地
 - 沖縄からの海路の搬入地に近い処
 - 右の木下/柿沼両氏の案が参考
 - 山東半島南側の港湾施設の近隣

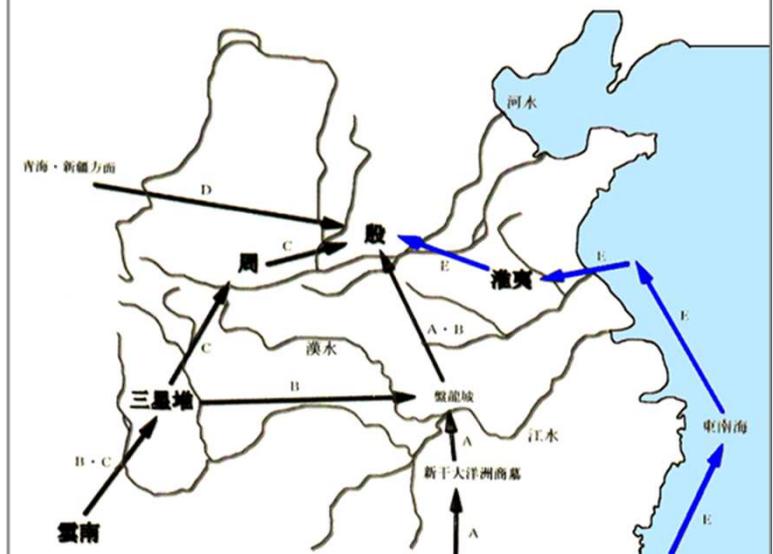
图4 有关宝贝流通路径的三种学说



柿沼陽平著「中国古代貨幣經濟史研究」より

木下尚子氏の科研報告書より

75 第一節 殷周宝貝の収集経路



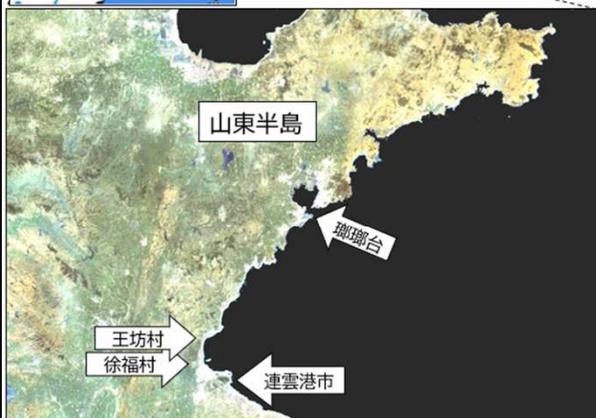
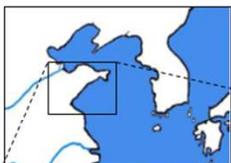
〔圖1〕 殷周宝貝の流入経路に関する諸説

宝貝交易と徐福

- 第7回の「古代史を解明する会(解明委員会)」2021年6月開催で、「大陸との徐福論」で、
 - 「倭人の渡来元」と「徐福の居住していた徐福村」の位置を示した。
 - 宝貝交易の管理・運営者:ボスの所在地と一致する。
- 徐福に関する中国の史書には、宝貝交易を行っていた記述は、一切無いが、倭人であり、宝貝交易の内容を考慮すると、その関係は明白。

33

徐福の遺跡・遺物など



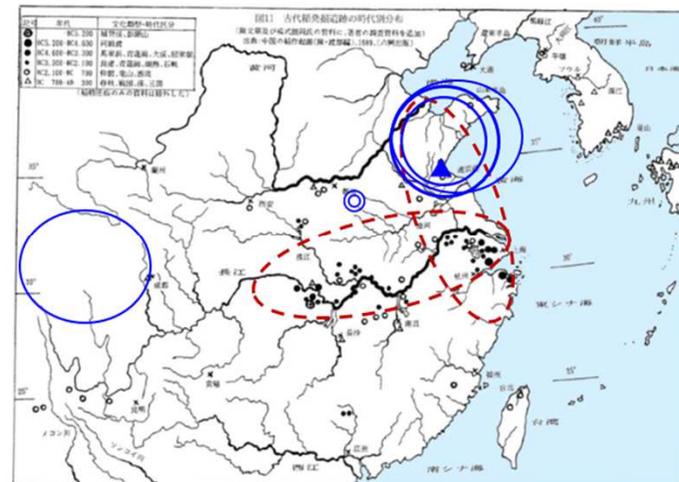
- ☆ 1982年6月徐福村が発見された。
 - 徐福は出発に先立ち、この村に残るものに徐姓を名乗ってはならないとの伝えたので、姓を変えたと村民の子孫。
 - 徐の家系図の一つが解析され、徐市(福)の存在が確認された。
 - その発表された結果、中国全土に散った徐一族の子孫から56部の家系図の存在が明らかになった。
 - 徐福村からは、鉄製手工道具とおびただしい冶金用の鉄塊や、葉研やローラが発見された。
- ☆ 徐福村の北東35km程の地に大王坊村がある。
 - 2000年以上前の大量の造船用の良材を含む、造船所の遺跡が発掘された。
 - 徐福一行の船を建造したとみなされている。
- ☆ 連雲港市の大王坊村も徐福村も、現在は、内陸にある。
 - ボーリングの結果、この地域は、黄河の運んだ黄土が5m堆積しているとの事。
 - かつては、海岸に面した航海に適した場所であった。

参考文献 羅其湘・飯野孝宥共著「弥生の虹棧 徐福」
程天良著 池上正治訳「徐福 霧のかげにたへ」

31

倭人の渡来元はどこか？

- 倭人の渡来元をたどる要素からまとめると、その可能性のある場所は、以下の地域となる。
 - 同一の体形＝骨格をした民族は何処にいたか？ 臨淄等山東半島 青海省
 - 甕棺の墓制を持つ民族は何処にいたか？ 長江流域 黄海・東シナ海沿岸
 - 日本で栽培された米と同じ品種の米は何処で栽培されていたのか？ 焦庄遺跡 ▲ 特定でき無い 多言語国家でどこかに居た可能性有
 - 倭語＝日本語を話す民族は存在したのか？ 河南省「陳」 ◎ 齊 ◎
 - 同一の遺伝子を持った民族は何処にいたのか？
- 倭人の渡来元の候補地は絞られて来た。
- では、徐福の居た場所は何処か？
中国の文献と遺跡から見てゆきたい。

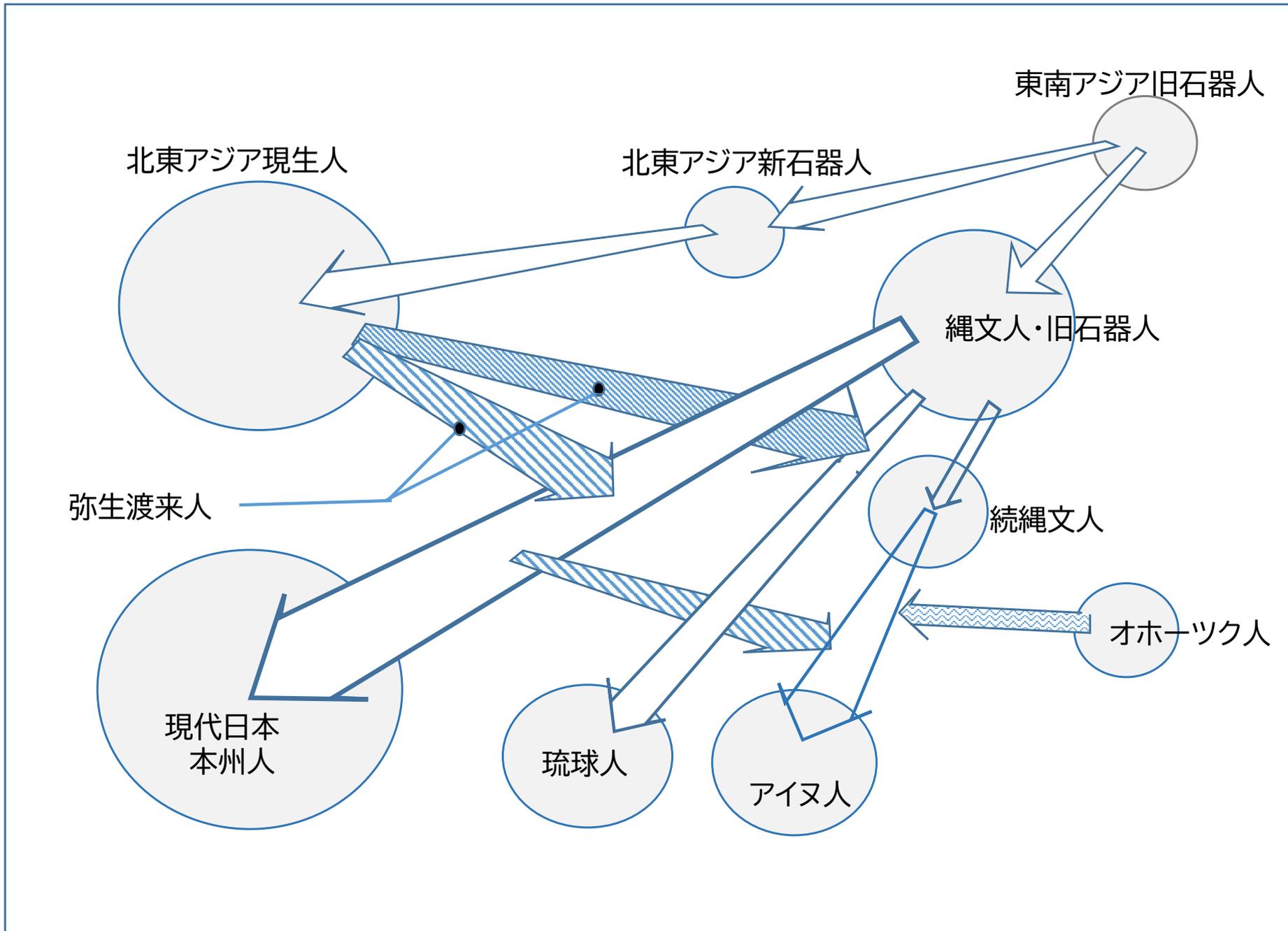


- 徐福に関する司馬遷の記述は、
 - 秦の始皇帝の命令で、
 - 多数の子供を含む人員を
 - 東方の地域に運んだ。
 - 目的は、「長寿の薬」を得ること
- 司馬遷は史記を書くに当たって、山東半島付近を2回以上実地に調査したとの記録がある。
 - そこまで調べた結果、上記の不本意な記述しか記載できなかった。
 - 司馬遷は歴史官であり、秦に残された公文書を見ることが可能な立場であった、
 - しかし、上記の内容しか記載できなかったことから、公文書への明確な記載がなかったことが推定できる。
 - 推察できることは、始皇帝が徐福を探し、面談する処では、書紀などが立ち入れない状況に有ったと推定する。
 - もしかすると、書記たちが、知らない言語で、始皇帝と徐福が話し、決定事項だけを、書記が判る言語で、伝えた可能性もある。
- 始皇帝は、宝貝を通貨から外し、宝貝交易を行っていた徐福等が困窮した時点で、徐福達を招致し、その能力を活用するある計画を立てていた。
 - その計画とは、宝貝の産地である沖縄と日本本土を、始皇帝の支配下に置くこと。
 - そのためには、沖縄/日本本土を知り、渡海航路の所在・渡海用船舶・航海技術を持つ徐福一族を配下に置くことが肝要。
 - 徐福から情報入手し、支配下に置く計画を立てたものと推定する。
 - 多くの人々を移民させ、土地を開拓し、兵員を送り、沖縄・日本本土を支配する。
- 徐福が賛成したために、計画は直ぐに実施となりった。
 - 徐福をトップに据えて、具体的な準備を始めた。
 - この具体的な準備にあたっては、記録・公文書は残ったが、目的・計画内容は、始皇帝・徐福以外は知らされなかったと推定する。「大陸との交流:徐福論」を参照下さい。

日本人の起源論

「埴原論文の図」修正案

20221114 丸地案



検討の条件：古代日本の地理的特殊性

• 古代日本の地理的特殊性

1. 海に囲まれた国であること。

- 舟・船での渡来が必須条件

2. 大陸側とは、黒潮で隔てられていた。(黒潮は、世界最大の海流)

- 舟・船に乗りなれた人でも、黒潮を越えることは、脅威。
- 古代人の地球観では、巨大な海流の流れる先は、海の果て。恐怖の地域。
- 中国人は、古代には、黒潮を越えることは出来なかった。
 - 三国志の時代の呉ですら不可だった。
 - 黒潮を越えることができたのは、倭人だけ。呉志・後漢書に記録有り。
- 黒潮を越えることが可能な民族は、黒潮の近くを舟で回遊していた民族。
 - 帆を装備した舟を所有していた民族

3. 海面上下に由来する大陸との徒歩往来の可否

- 氷河期には海面が低下して、人が徒歩で渡れることで、大陸間の移動の可能性を検討。
- 新人(ホモサピエンス)が移動した時期は5-6万年以降、その期間中に絞ると
 - 2万年前の極寒期に、海面低下が100mを越えた。
 - この時期に、朝鮮半島と九州の間は陸続きにはならなかった。
 - 本州と北海道の間も海で隔てられた。
 - 北海道とサハリン・シベリアは陸続きになった。

• 海洋民族と非海洋民族

- 大多数の人が、泳げるか？ ・泳げないか
- 舟・船に乗り移動するには、泳げる必要がある。
 - 物理的には、乗船するには、泳げることは不必要だが、民族移動を考慮する時は不可欠な条件。

現在の日本では日本語が使われている。

弥生渡来民が日本に来た後に、縄文人と混血し、言語は日本語に置き換わったと推定される。
母国語が変わったことになる。

その変化の時に縄文人が絶滅した訳ではない。

縄文人の血はその後も、現在までも存続している。

地域差が有るが、Y遺伝子では20%から60%存続する。

- 一つの国で、ある時期から、**母国語が、別の母国語に置き換わる条件**
 - 言語学に答えを探したが、答が有るようには見えない。
 - 一つの国の母国語は、通常は変わらない。
 - ある国に、少数の他民族が入ってきた場合は、
 - 他民族は排除される。又は、
 - 吸収され、混血し、少数民族の言語は消滅し、母国語は変わらない。
 - ある国に、別民族が攻め入り、住民を支配下に置いた場合。
 - 言語は二分化し、支配民族の言語と被支配民族の言語が併存する。
 - この状態が、長く続いた場合には、支配民族の言語に母国語が置き換わる。
 - 世界史上の実例が存在する。
- **日本の先住民である縄文人は、**
 - **磨製石器を世界に先駆け、3万年前から活用してきた優れた民族**（日本以外では、1万年前に開始）
 - 条件の厳しい黒潮の流域をベースにした**海洋民族**
 - 沖縄、九州・本州から、北海道→樺太→シベリヤへ、九州から朝鮮半島へ進出していた民族。
- 決して、無能な野蛮人では無かった。

ご清聴有難うございます！

- 日本人の起源を見直した処、「沖縄の旧石器人の絶滅論」が、ネットワーク上から消滅していたことを発見して、興奮して、その説明が長くなりすぎたかとも反省しております。
- 日本人の起源を調べると琉球・沖縄に関わることが沢山出てきました。
 - その一つ一つの材料を追って行くと、納得の行かない理由で、否定されていました。
 - その否定理由を、おかしい！間違っている！と調べ、論証することに、多くの時間と労力を費やして来ました。
 - 琉球・沖縄を良く知る人に教わりましたが、自分の意見を言うと、明らかに不快の念を示され、戸惑いました。理由は、「沖縄の旧石器人の絶滅論」のようでした。
 - 今回は、「沖縄の旧石器人の絶滅論」を気にせずに、論じることができるので、話が長く、長くなってしまいました。ご容赦下さい！